

岡山県山陽町埋蔵文化財発掘調査概報

正崎 2・4 号古墳

付 浦山遺跡ほか

1989年3月

山陽町教育委員会

岡山県山陽町埋蔵文化財発掘調査概報

正崎2・4号古墳

付 浦山遺跡ほか

1989年3月

山陽町教育委員会

## 序

豊かな自然環境にめぐまれた山陽町は、古くから先人たちの生活の場となったところで、縄文時代の南方前池遺跡をはじめ、国指定史跡の両宮山古墳や備前国分寺跡など多くの文化財が遺されております。しかし最近の地域開発は貴重な文化遺産をつぎつぎに破壊しており、文化財の保護保存はいっそう重要な課題となっております。

山陽町ではこのたび総合公園の建設事業が実施されることになりました。公園造成地内には正崎古墳等周知の遺跡があり、これらの保護保存について岡山県教育委員会文化課と協議を重ねてきましたが、現状保存の困難な2基の古墳についてはやむなく記録保存の発掘調査を実施することになりました。

ここに調査の概要を報告する正崎2・4号古墳は、小円墳ではありますが、銅鏡・三環鈴・甲冑など特色ある副葬品を出土しており、地域史の研究に重要な資料を加えることになりました。この報告書が歴史の研究と文化財の保護保存の参考になれば幸いです。

本調査を実施するにあたり、ご指導賜わりました岡山県教育委員会文化課、大学、博物館等の諸先生方、また山陽町当局、地元の方々に大へんお世話になりました。厚くお礼申しあげます。

1989年3月

山陽町教育委員会  
教育長 小坂 静夫

## 例　　言

1. 本書は、山陽町教育委員会が、山陽町総合公園建設工事に伴い発掘調査を行った「正崎2・4号古墳」および土器散布地の試掘調査の概要報告書である。
2. 本書で報告できなかった出土遺物の鉄器・土器等は現在整理復元中であり、ひきつづき精査のうえ、あらためて報告する予定である。
3. 山陽町総合公園は、都市所管補助事業として山陽町が行う公園事業で、山陽町正崎地区および尾谷地区内に建設されている。
4. 本書に概要を報告する正崎2・4号古墳および浦山・吉野土器散布地は正崎地区内に所在し、牛岡土器散布地は尾谷地区内にある。
5. 本遺跡の発掘調査は、岡山県教育委員会文化課の指導のもとに、則武忠直（山陽町郷土資料館）國安敏樹（山陽町教育委員会）が担当し、昭和62年7月から昭和63年11月までの期間実施した。
6. 本書の編集執筆は、則武忠直・國安敏樹が協力して行った。文章および写真撮影は則武忠直が担当し、測図および製図は國安敏樹が行った。
7. 本書の作成にあたり、岡山県教育委員会文化課・岡山県古代吉備文化財センター・岡山大学・岡山理科大学・岡山県立博物館の諸先生方、および、神原英朗、奥田尚、狐塚省藏、臼井洋輔、高畠知功の諸氏に教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。
8. 本遺跡の出土遺物は、山陽町教育委員会が保管し、山陽町郷土資料館に収蔵展示している。

# 目 次

## 序

## 例 言

<b>第 1 章</b>	<b>調査の経緯と経過</b>	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	発掘調査の経過	1
<b>第 2 章</b>	<b>遺跡の環境</b>	3
第 1 節	地理的環境	3
第 2 節	歴史的環境	3
<b>第 3 章</b>	<b>正崎 2 号古墳</b>	4
第 1 節	立地と調査前の概況	4
第 2 節	調査の結果	7
第 3 節	ま と め	27
<b>第 4 章</b>	<b>正崎 4 号古墳</b>	27
第 1 節	立地と調査前の概況	27
第 2 節	調査の結果	31
第 3 節	ま と め	36
<b>第 5 章</b>	<b>浦山遺跡</b>	36
第 1 節	立地と調査前の概況	36
第 2 節	調査の結果	36
<b>第 6 章</b>	<b>試掘調査の概要と結果</b>	50
第 1 節	試掘第 1 区（正崎浦山）	50
第 2 節	試掘第 2 区（正崎浦山）	50
第 3 節	試掘第 3 区（正崎浦山）	54
第 4 節	試掘第 4 区（正崎吉野）	56
第 5 節	試掘第 5 区（尾谷牛岡）	61

**挿 図** 1 図～63図

**図 版** 図版 1 ～図版 25

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

岡山県赤磐郡山陽町は、岡山県営山陽団地や桜が丘団地など、大規模な住宅団地の開発に伴う居住環境の整備と、地域住民の健康増進を目的とする総合公園の建設を計画し、都市所管補助事業として昭和61年8月公園事業の認可を受けた。総合公園用地は、町のほぼ中央部にあたる正崎・尾谷地区の丘陵の一部約17ヘクタールを削平し、民潤地のほぼ半分を埋め立てて造成するというもので、計画ではここに体育施設・自然公園などが建設される予定となっている。

この総合公園造成計画区域内には、岡山県遺跡地図（岡山県教育委員会発行）に6基の古墳が記載されており周知の遺跡となっている。そのため山陽町では、昭和57年12月の計画段階において、埋蔵文化財の取り扱いについて岡山県教育委員会文化課との事前協議を行った。今後、県教育委員会文化課の専門職員による現地確認調査の結果を得て、さらに協議を行うこととなった。

昭和60年6月、岡山県教育委員会文化課の現地調査が実施され、用地内および周辺に所在する6基の古墳が確認され、さらに、弥生式土器の散布地が発見された。この調査にもとづき、昭和60年7月再協議を行った結果、総合公園造成区域および周辺に所在する6基の古墳中4基については一部工事計画を変更し現状保存となつたが、正崎2・4号古墳については記録保存とし、発掘調査を行うこととなった。さらに土器散布地についても遺跡確認の調査を実施することとなった。

昭和60年8月5日付で、岡山県教育委員会から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）があり、①、正崎1号墳、正崎3号墳、正崎5号墳、正崎6号墳については縁地帯として現状保存する。②、正崎2号墳、正崎4号墳については工事施工前に発掘調査を実施する。③、5か所の遺物散布地については、工事前に確認調査を実施する。②・③にかかる調査の結果、重要な遺構が発見された場合は別途協議する。という内容であった。

上記の通知にもとづき、昭和62年1月31日山陽町教育委員会は、埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、昭和62年6月2日付で文化庁記念物課長より通知書受理について通知を受けた。

発掘調査は、岡山県教育委員会文化課の指導のもとに則武忠直（山陽町郷土資料館）、國安敏樹（山陽町教育委員会）の両名が担当した。

### 第2節 発掘調査の経過

正崎2・4号古墳を主とする山陽町総合公園内遺跡の発掘調査は、山陽町教育委員会が、昭和62年7月から、翌昭和63年11月に至る期間に実施した。

今回主として発掘対象となった正崎2号古墳および正崎4号古墳は、公園造成工事によって丘陵もうとも削平されるため、古墳周辺をふくめ全面発掘による調査を行った。

正崎2号古墳は、昭和62年7月14日下刈り立木伐採作業から調査にかかり、調査区設定、杭打ち、

写真撮影、地形測量等を行ったのち、墳丘発掘と調査をすすめた。8月28日第1内部主体検出。9月主体部発掘、実測。10月墳丘下層発掘、断面実測。11月墳丘地山面の構造発掘、実測等の調査を実施し、11月16日をもって本古墳の調査を終了した。平成元年3月現在公園造成によって本古墳は完全に消滅した。

正崎4号古墳の調査は、2号古墳の調査と併行して調査を実施した。7月20日草刈り立木伐採、つづいて調査区設定、杭打、墳丘実測。8月墳丘発掘、実測。9月主体部組合せ式箱式石棺発掘調査、実測、写真撮影等を行い10月30日本古墳の調査を終了した。平成元年3月現在、正崎4号古墳は消滅したが、内部主体の箱式石棺は公園縁地帯に移築し、復元保存されている。

総合公園内の遺跡については、正崎2・4号古墳のほかに土器散布地が事前調査によって知られており、造成地内の5か所について遺跡確認調査を実施した。

試掘第1区（正崎・浦山）は、正崎4号古墳の西方につづく地域で、4号古墳の調査と併行して行った。7月20日下草刈り、調査区設定、8月トレンチ発掘、実測、写真撮影等を行い、9月1日第1区の試掘を終了した。

試掘第2区（正崎・浦山）は、2号古墳と4号古墳の中間にあたる地域で、8月16日トレンチ調査を開始、発掘、実測、写真撮影等8月31日終了。

試掘第3区（正崎・浦山）は、正崎2号古墳の所在する丘陵尾根の北側斜面で民潤地にのぞむ地域である。8月26日下草刈り、調査区設定、杭打ち、9月トレンチ発掘、10月実測等調査を実施、10月23日試掘を終了。

試掘の結果、弥生式土器が多量に出土する土器満りが発見され、弥生集落址の可能性ありとして、岡山県教育委員会文化課の指示により約1,400m<sup>2</sup>の範囲を全面発掘調査することになり、昭和62年12月から翌63年7月に至る期間、浦山遺跡の全面発掘調査を行った。

試掘第4区（正崎・吉野）は、正崎2号古墳の所在する丘陵尾根の南側斜面で、吉野池にのぞむ地域である。昭和62年10月5日下草刈り、調査区設定、杭打ち、トレンチ発掘、実測、写真撮影等調査を行い12月18日、1次調査を終了した。

試掘の結果、さらに丘陵尾根に近い斜面から南北にトレンチを入れる調査を指示され、昭和63年9月13日から10月21日に至る期間トレンチ発掘による調査を実施した。この地区は、平成元年現在、丘陵頂部を削平した土砂で埋められ、土器包含層を含む構造は地下に深く埋没し公園敷地となっている。

試掘第5区（尾谷・牛岡）は公園用地の東部にあたり、中八幡神社から北方へ延びる丘陵尾根から谷にかけての地域で事前調査の際、若干の弥生式土器が採集されている。昭和62年10月20日、下草刈り、樹木伐採を行い、調査区設定、トレンチ発掘、実測、写真撮影等の調査を行った。12月4日で一応調査を終了したが、岡山県教育委員会文化課の指示により、さらに調査区域を拡大した。昭和63年4月4日から4月28日の期間、丘陵尾根上から谷へ傾斜する地域のトレンチ発掘調査を実施した。

以上遺跡確認の調査とその結果にもとづく再調査および浦山遺跡の全面発掘調査を実施したが、正崎2・4号古墳とともに全遺跡が削平消滅あるいは埋没して、現在その姿を見ることはできない。

今回の調査は、総合公園造成工事と競合する状況のもとに、調査期間も限られ、きわめて不十分な調査態勢で、しかも調査員の浅学のため調査の完全を期すことができなかつた。報告書の不備な点は調査員の責任でありお詫びする次第です。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

正崎2・4号古墳の所在する山陽町は、岡山市の北東に隣接する農村で、桃・葡萄など果樹の生産地として著名である。近年、大規模な住宅団地が造成され、岡山市の通勤圏となっている。

山陽町は赤磐郡の中南部に位置し、北の吉備高原から南の瀬戸内沖積平野への漸移地帯にある。町域の周囲は概して低い丘陵に囲まれており、中央を北から南へ砂川が貫流し、その運搬する土砂によって浅い盆地状の埋積平地を形成している。

周囲の丘陵はおおむね花崗岩からなり、局地的に古成層・山砂利層をみせている。砂川は風化しやすい花崗岩の山地を流下し、山陽町南部では天井川となっている。農業の灌漑は多く山間の溜池に頼っており、平地の大部分は条里制の地割りを遺す水田となっている。周辺の山麓および丘陵はなだらかで、開墾された果樹園が多い。

正崎2・4号古墳の所在する正崎丘陵は、近年大規模な住宅団地として造成された、町東部の桜が丘団地の低丘陵が西に延び、砂川につきあたるような位置にある。

山陽町の東と西に位置する標高60m～70mの低い丘陵地帯に、山陽団地と桜が丘団地が建設され、今向さに両団地の中間にあたる正崎丘陵が総合公園として開発されている。このように山陽町の地理的な自然環境はもとより、住民の生活環境も、また町の経済構造までも大きく変貌を遂げようとしている状況である。

### 第2節 歴史的環境

山陽町には原始古代の遺跡が多く残されている。縄文時代の食料貯蔵庫群を出土した南方前池遺跡をはじめ、弥生時代の集落址として知られる用木山遺跡や憩団遺跡があり、便木山遺跡や愛宕山遺跡からは、多數の土塙墓群が発掘されている。そのほかにも弥生時代の遺跡は町域全般にわたっている。

また古墳の分布も多く、国指定史跡の両宮山古墳をはじめ、大小約200基の古墳が周知されている。山陽町域の古墳を概観すると、町南西部西高月の平地に、全長192m、周濠に水を湛えた大前方後円墳両宮山古墳を中心にして、小山古墳、朱千駄古墳、森山古墳、廻り山古墳、茶臼山古墳などがあり、さらに玉井丸山古墳、牟佐大塚古墳が隣接する大形古墳群を形成している。これらの大古墳は、古代吉備東部に大きな勢力を築いた首長層のものと考えられる。

この西高月古墳群の後背地にあたる丘陵上（山陽団地内）には、便木山方形台状墓をふくむ古墳発生期ないし前半期古墳とみられる用木古墳群があり、さらに中期、後期におよぶ野山古墳群、岩田古墳群など約60基の大小古墳が密集している。

前期古墳が用木山上に繁かれ、やがて中期に至って西高月の平地に大古墳が築造される。さらに岩田14号古墳に代表される横穴式石室を内部主体とする、後期の古墳が再び用木山の中腹に營造されている。

また、町域の北西部上仁保地区から赤坂町西窪田地区におよぶ一帯に、吉原古墳群を中心とする約40基の古墳が分布している。全長約70mといわれ、巨大な横穴式石室をもつ鳥取上高塚や、二面の銅鏡を出土した吉原6号古墳などの前方後円墳を主とする西山古墳群を形成する。カメ棺を伴う古い時期のものから、古墳終末期に近い小石室をもつ吉原1・3号古墳に至るバラエティに富んだ様相をみせている。

今回報告する正崎2・4号古墳は、前記古墳群とは砂川を距てて相対する町域東部の高陽地域に所在する。

この地域の古墳分布は、前方後円墳など大形首長墓の系列を伴わないので特徴的である。古墳は数基づつ小単位に支群を構成し分散的に所在する。正崎2・4号古墳に接する地区では、北方に後期の横穴式石室をもつ石山古墳群があり、東方に続く丘陵に二井大池古墳が所在していた。さらに南方に高屋古墳群、二井古墳群、中島古墳群が点在するが、概して小円墳である。

以上のような古墳の分布状況、古墳の規模などから推測すれば、高陽地域の古墳は、高月地域の強力な首長層に従属しながら、小地域の長となった有力者のものではないかと思われる。

奈良時代に至ってこの地域には、備前国分寺および国分尼寺が建立され、また古代山陽道が通り高月駅が馬屋に置かれるなど交通の要衝の地であった。

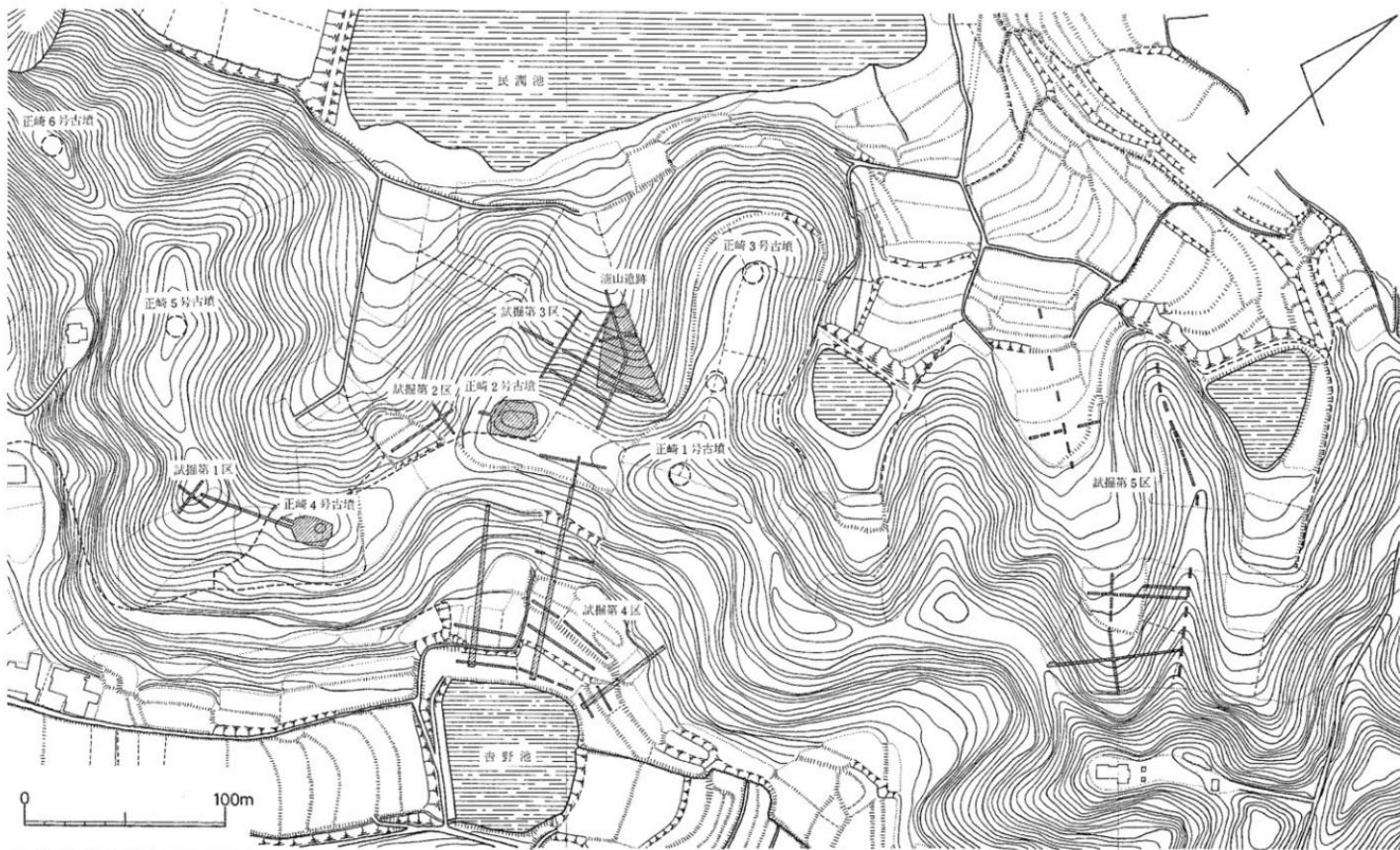
以上のように、砂川流域の埋積平地をとりかこむ周辺の丘陵上には多くの遺跡が存在し考古学的な資料も豊富である。山陽町域の一つの単位地域において、縄文時代から弥生時代へと飛躍的な発展を遂げ、さらに古墳時代には吉備東部に強大な政治勢力をつくるに至ったと考えられる。両宮山古墳や備前国分寺に象徴されるように、古代吉備における政治文化の一中心となった地域であったといえよう。

## 第3章 正崎2号古墳

### 第1節 立地と調査前の概況

正崎2号古墳は、岡山県赤磐郡山陽町正崎字浦山1368番地の丘陵上に所在する。昭和62年7月14日から同年11月16日に至る期間山陽町教育委員会が発掘調査を実施した。

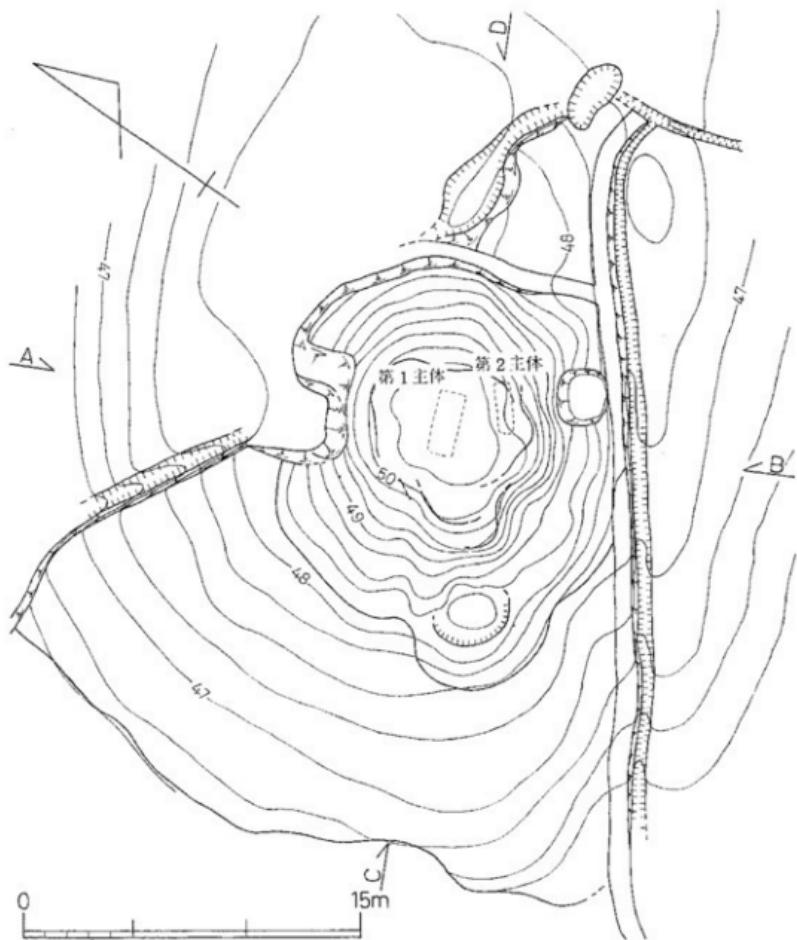
本古墳は、東方の桜が丘団地に続く丘陵尾根が幾つもの支脈を分岐させながら西方に延びて、砂川に接するように平地に臨む正崎浦山の尾根上に立地する。同じ丘陵上には東へ約90mを距てて、



第1図 正崎古墳群周辺地形図

正崎1号古墳、正崎3号古墳が並び、西へ約115mの距離に正崎4号古墳が所在する。約2kmの西方に東高月遺跡群（山陽国地内）北方には吉原古墳群に相対する位置にある。

正崎2号古墳の立地する浦山の丘陵尾根上は馬の背状ながらやや広い平坦部となっている。古墳の墳頂部は標高50.45mで眺望はきわめて良好である。とくに西北部鈴川流域の平地を一望できる。眼下の水田地帯よりの比高約30mである。



第2図 正崎2号古墳 調査前外形容

調査前の本古墳は、松、楓、笹などの生い茂る雜木林であった。古墳の周辺はほとんど開墾畑で、桃、柿、ブドウなどの果樹園となつており、開墾によって墳端部はかなり削平されていた。しかし墳丘中心部は盛り土もあり流失しておらず、浅い盗掘痕があったが主体部は完全に保存されているものと認められた。

## 第2節 調査の結果

### 1. 墳丘の規模と外形

本古墳は丘陵尾根上の自然の高まりを利用して整形築造された円墳である。

墳丘を十文字に切断するトレンチと、墳丘の全面剝土調査を行った結果、周溝、葺石、埴輪等外部施設は全く認められなかった。したがつて古墳の墳域は判然としないが、墳丘測量の結果では、尾根走向にわざかに長い楕円形となっており、東西約20m、南北約16m、高さ約2.5m程度の規模をもつ円墳である。墳端部を開墾によって削り取られているほかは、殆んど原形を保つ整然とした外形を残している。

発掘調査の結果と墳丘断面図等から、本古墳の墳丘築造過程を考察する。墳丘の築造は丘陵頂部の自然の高まりを利用していている。黒雲母花崗岩の礫乱土（奥田尚氏の教示による）からなる丘陵地山を削平整地して、標高48.70mの高さで、径約10mのほぼ水平な面をつくり、墳丘の基盤としている。

この基盤上に、弥生式土器片を多量に含む黒色土（第3図7）約20cmを置き、さらにその上に、黒灰色土（第3図8）を約40cm積み上げてほぼ水平面をつくっている。（この面が木棺床面となる。）その中央に長さ約2.6m、巾約90cmの木棺を据え、木棺の底部と周囲に粘土を施し、そのままわりを粘土質の黒色土で固くたたき締めながら棺を覆う盛土を積みあげていったと推察される。特に木棺周囲は、黒色の濃い有機土層で石のように固く締まっていた。基盤から三層目（第3図4）まで約110cmの盛り土は、弥生式土器を多量に含む有機土層であり、墳丘築造のためわざわざ選んで弥生遺跡の黒土を運んだと考えられる。墳丘上層部（第3図2.3.1.）は山土の混入した褐色土層であるが、やはり弥生式土器を包含している。

木棺を包む墳丘盛り土は、中心部で基盤から約170cm、木棺床面から約110cmを測る。相当量の流失を考えれば、原形は地山基盤から2m程度の盛り土があったと推定される。

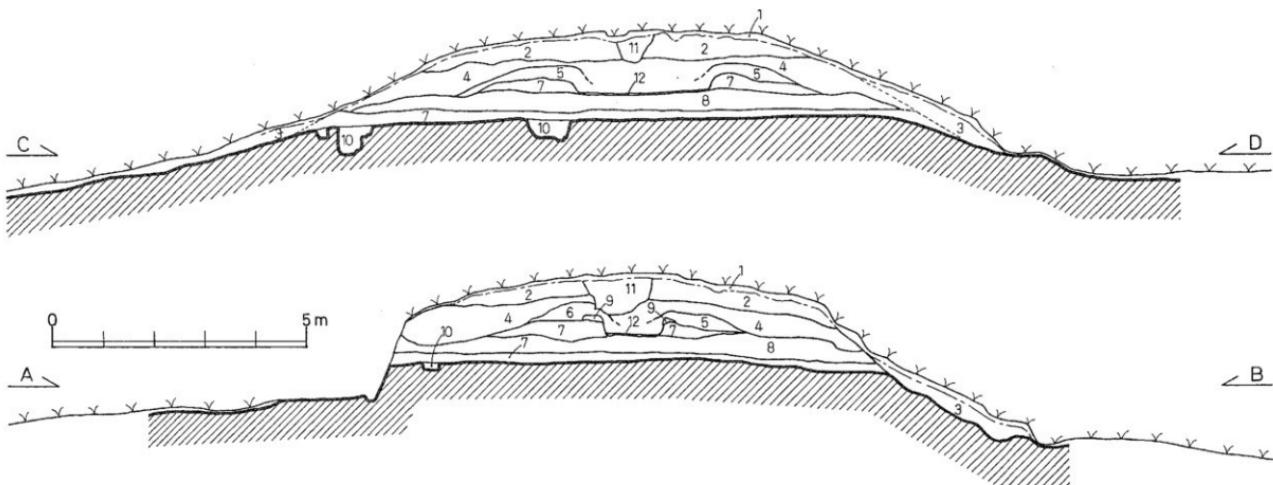
古墳の調査後、墳丘基盤となった地山削平面まで掘り下げたところ、ピット状造構3、柱穴状造構約30個所が検出された。（第5図）古墳築造と関係する遺構の可能性を予想して発掘調査を行つたが、伴出する弥生式土器等から本古墳には直接関連しないものと推察された。

正崎2号古墳下層造構は（第4図）弥生後期の住居址等の造構が古墳築造の際上層部を削り取られ、深く掘り込まれていた部分が遺存したものと推察される。

柱穴状のものは、径30cm～50cm程度のもの約30個所が遺存するが、全く不規則な配置状況でその性格を明瞭にできない。

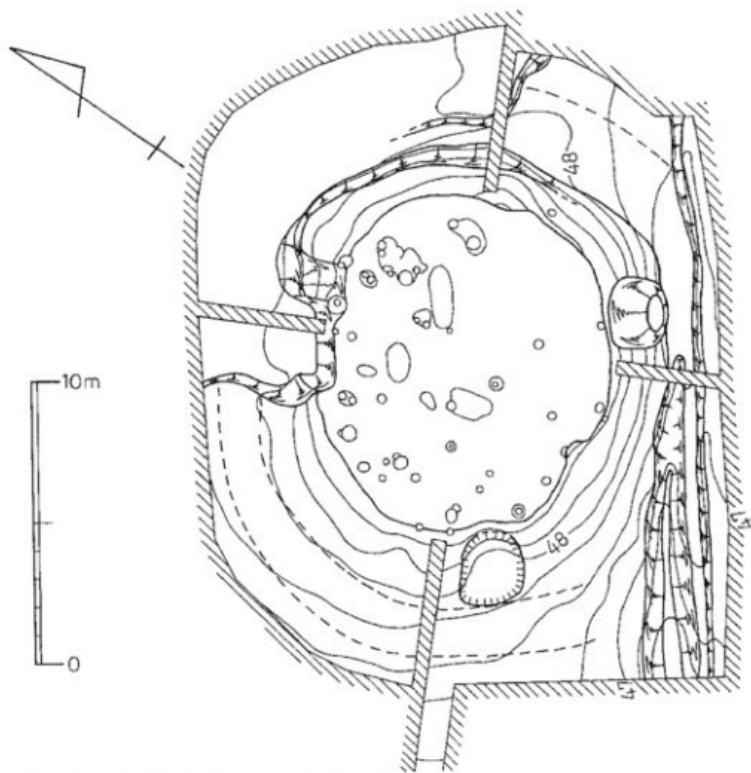
ピット状造構も、土塙墓か貯蔵庫的なものか判断しがたい。P1（第7図）は長径150cm巾90cm

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1. 表土         | 7. 黒色土(粘土質)  |
| 2. 褐色土(山土混入)  | 8. 黒褐色土      |
| 3. 褐色土        | 9. 主体部粘土     |
| 4. 灰褐色土(山土混入) | 10. 芽生ビット    |
| 5. 灰色土(粘土質)   | 11. 褐色土(盪掘痕) |
| 6. 黒灰色土(粘土質)  | 12. 主体部床土    |

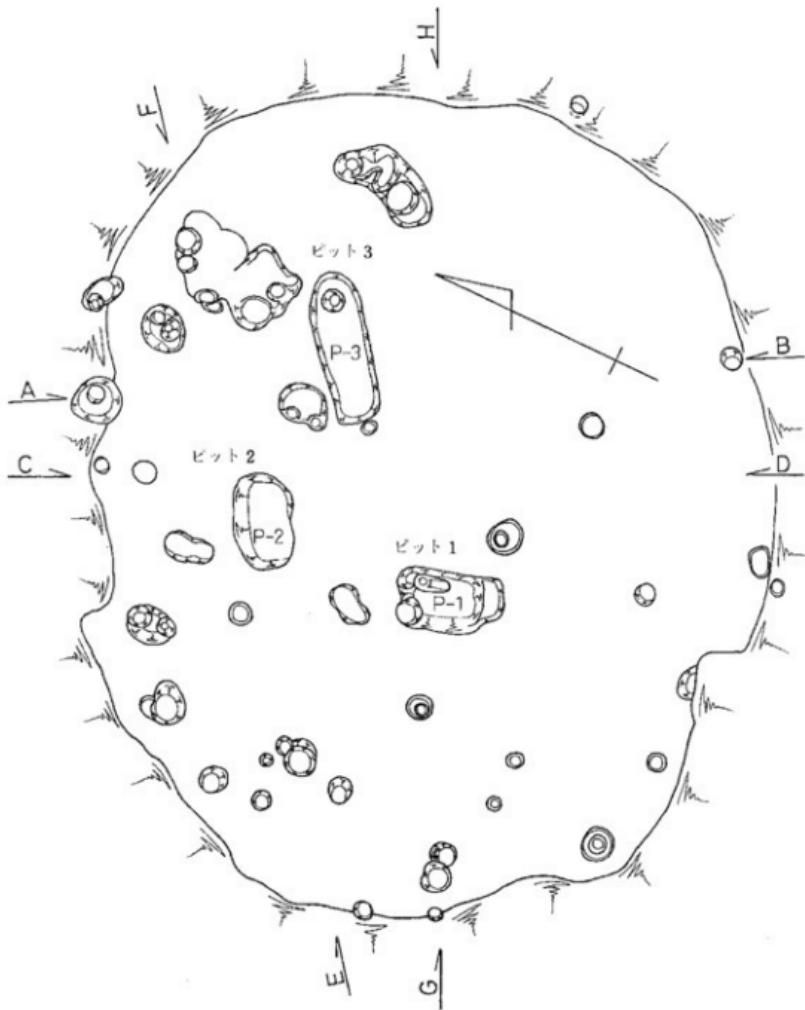


第3図 正崎2号古墳 填丘断面図

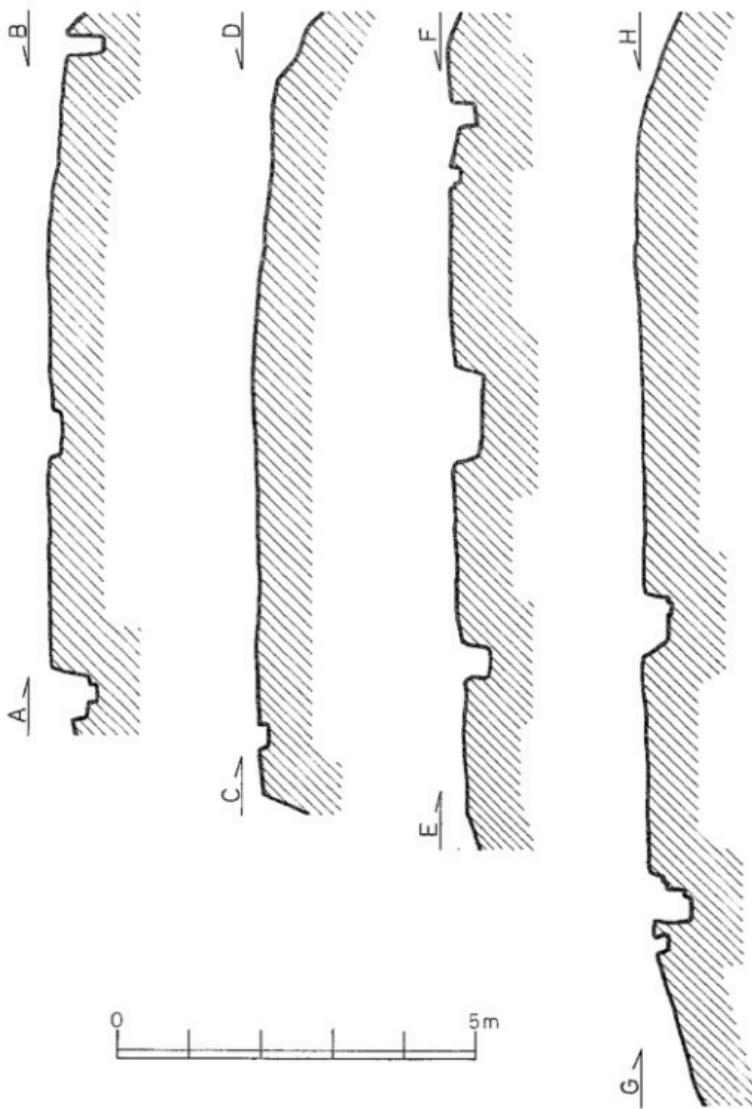
程の楕円形で深さ約40cmを測る。埋土中に若干の弥生式土器片が検出された。P 2（第8図）は、長径150cm、巾90cm、深さ50cmで、若干の土器片が検出された。P 3（第9図）は、長径2.2mと細長く、巾70cm、深さ約20cmである。土壤墓の可能性が考えられるが確証は得られない。



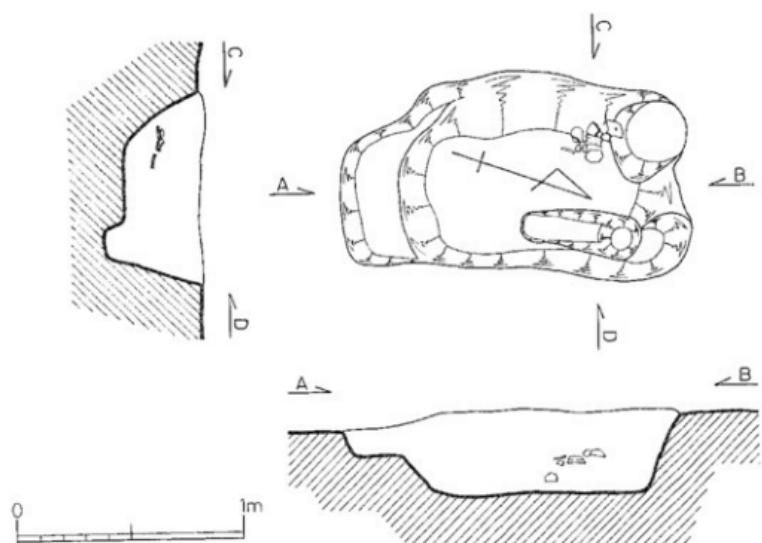
第4図 正崎2号古墳下層遺構外形図



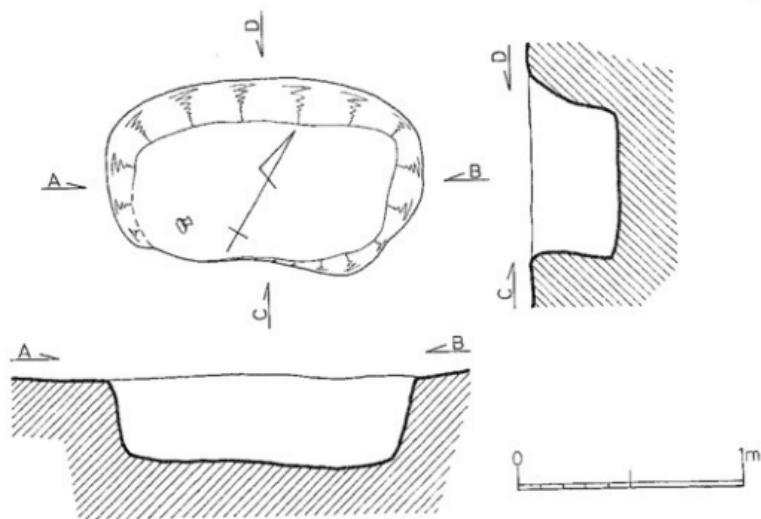
第5図 正嶋2号古墳下層遺構図



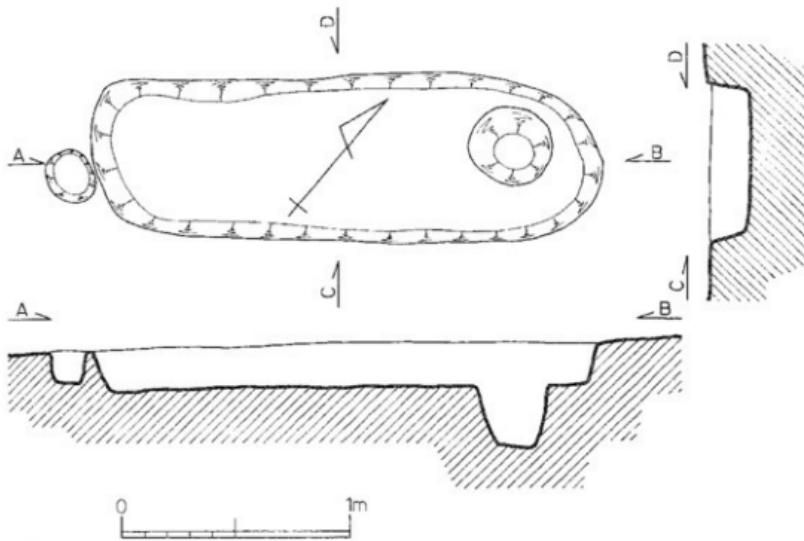
第6圖 正崎2号古墳下層遺構断面図



第7図 正崎2号古墳下層遺構 ピット1



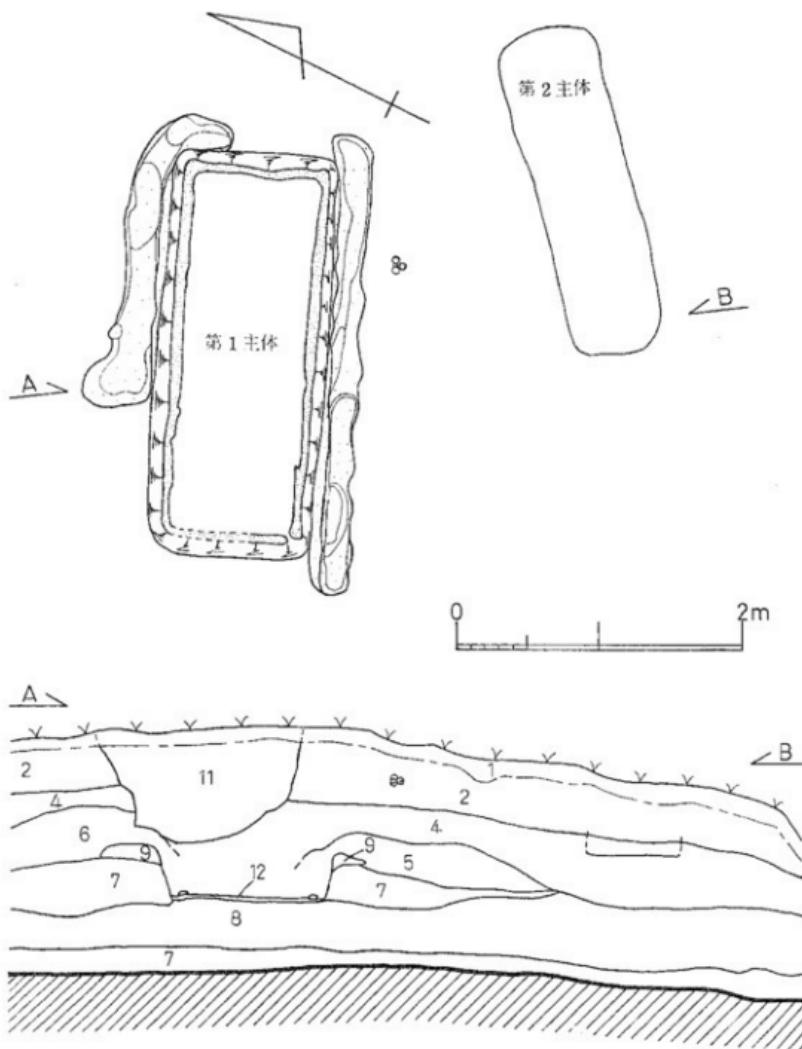
第8図 正崎2号古墳下層遺構 ピット2



第9図 正崎2号古墳下層遺構 ピット3

## 2. 墓葬施設

本古墳の埋葬施設は2主体である。墳丘中央部に埋葬された木棺直葬の第1主体のほか墳頂部南東隅に土塙墓状の第2主体が検出された。



第10図 正崎2号古墳 主体部位位置図

## 第1主体

本古墳の中心主体は、墳丘中央部の現地表下約110cmに埋納された直葬の木棺である。棺材はすでに腐朽消滅して遺存しないが、豊富な副葬品を残す床面、埋土に残された痕跡、木棺周辺に施された粘土等の状況から推定して、外法長約2.6m、外法巾約90cm（高さ不明）の木棺である。木棺の長軸中心線は北68度東を指しており、床面はほぼ水平である。

木棺の埋納は、一般的に墳丘を築き墓塚を掘り木棺を納めたと考えられるが、本古墳の場合は、墳丘盛り土中に墓塚の掘り方なく、棺側に施された粘土や黒色有機土層の盛り方からみて異った方法がとられたと考えられる。推測して私見を述べると次のように思える。

墳丘基盤となる地山整地面に、黒・灰色有機土を約60cmの厚さに積みあげて水平面とする。その中央部に棺台となる4箇の人頭大の石を四方に配置し、その上に木棺を載せる。木棺底部とその周間に粘土を施し、板の縫ぎ目には粘土の目張りをする。黒色の濃い有機土を選んで棺の周囲を固めながら埋めていく。このような埋葬状況を想像することができる。

棺内の施設としては、先に述べた棺台と考えられる4個の花崗岩の割り石（20cm×20cm）が床面上長軸に2列、180cmと120cmの間隔をおいて配置されており、いずれも赤色顔料が付着している。中に副葬の鉄器が石の上側にあり、棺の上にあった石とは考えられない。木棺東小口から約20cmの位置に枕石と考えられる割り石（7cm×15cm）があり、遺体頭部とみられる。赤色顔料は棺内全体に認められるが、特に床面東部に多く残っていた。

粘土は木棺の縫ぎ目に目張りとして使われたほかに木棺の下部を全体に包むように遺存しており、特に木棺の蓋の縫ぎ目は、巾20cmの粘土帯が5本遺存することから考えて、巾50cm程の板5枚程、横並べにしたのではないかと思われる状況である。

### 3. 副葬品の出土状況

本主体の副葬品は、木棺内とその周辺から出土した、銅鏡、玉、直刀、剣、甲冑、鉄鎌、鉄鎌、三環鎧、その他があり、その出土状況は図示したとおりである。（第13図）主なものについて東小口から順に説明する。

#### 〔鉄鎌〕

棺内東小口隅の両側に約5cm程の粘土で覆われた下から、整然と束ねられた状態の鉄鎌が検出された。それぞれ約20本の鉄鎌が矢尖を東向きに揃えて置かれていた。矢柄はないが、矢筒に納めたものを遺体頭部の両側に供献したものと推察される。

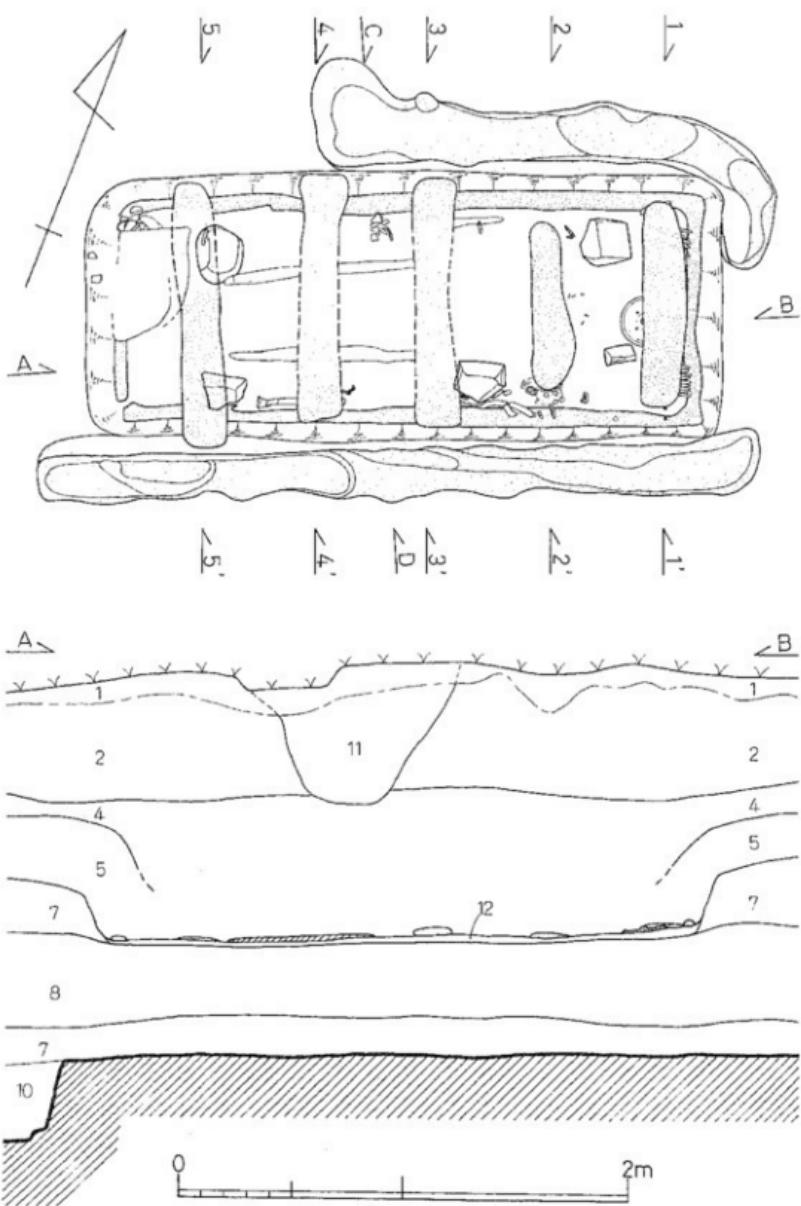
#### 〔鉄鎌〕

東小口北隅の角のところに鉄鎌と並んで置かれていた。刃部を棺の内側に先端を西に向け、やや傾いた状態で検出された。

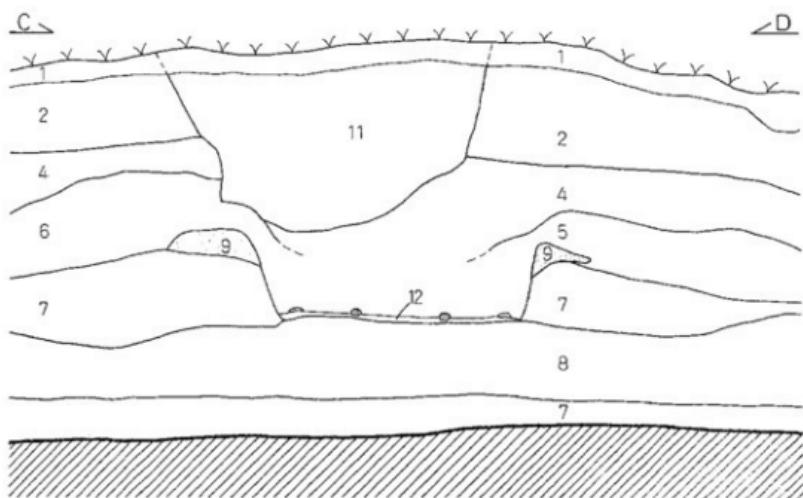
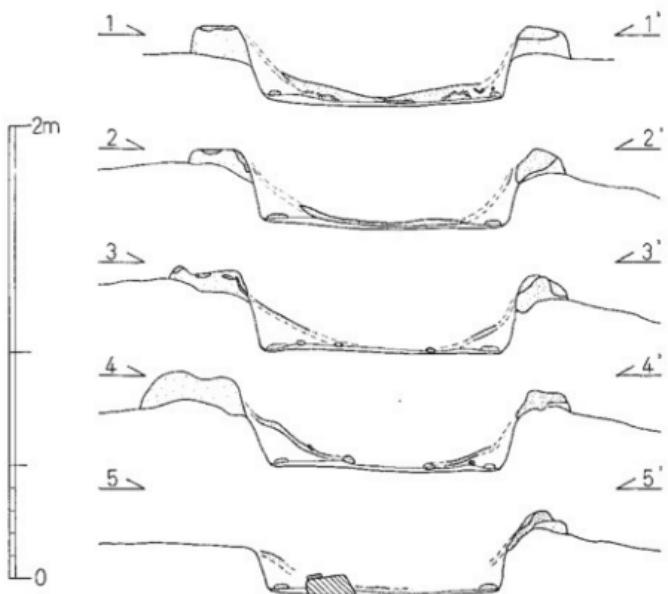
#### 〔銅鏡〕

木棺東小口より約23cm西の床面中心線上に鏡面を下にした銅鏡1面が検出された。

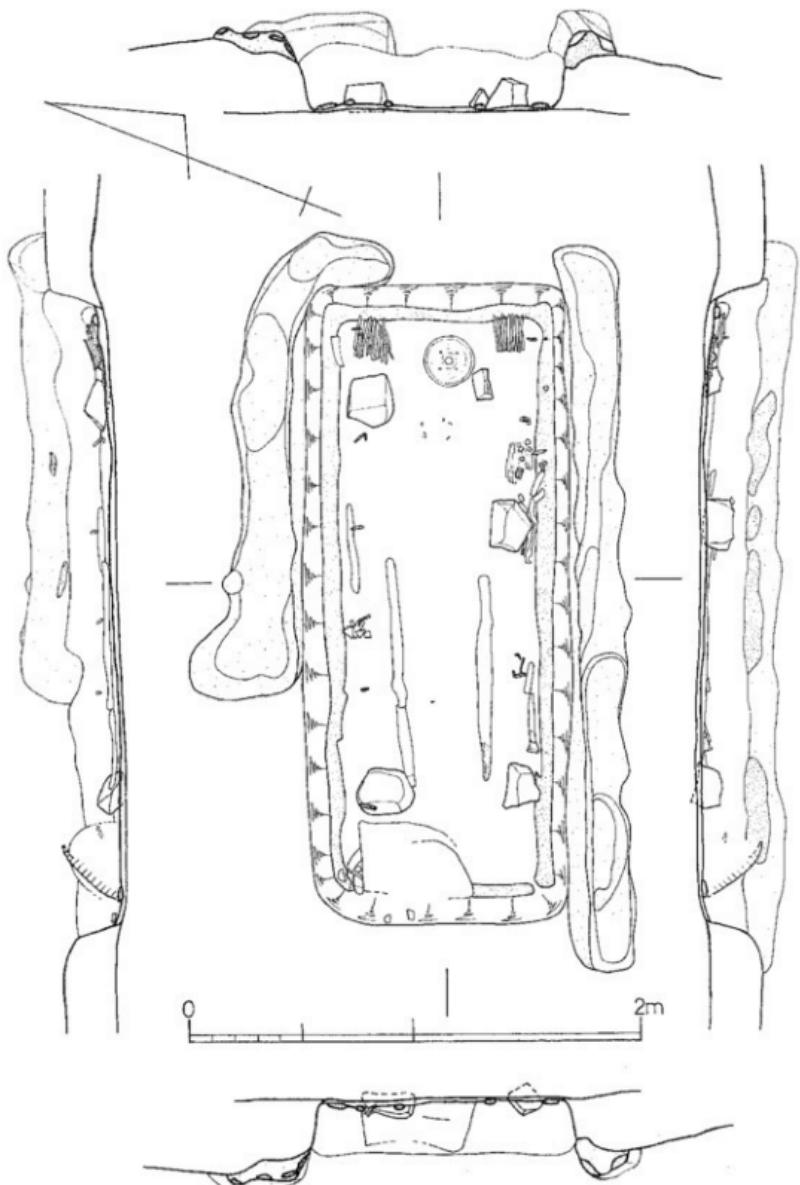
銅鏡の上面は約3cm程の厚さの粘土で覆わされていた。銅鏡に張り付くように黒く腐食した木質と鏡面に付着した布目痕が認められた。銅鏡の裏側も同様で、布に包み木棺に入れられた状態が推定できる。銅鏡に接して枕石があり銅鏡は被葬者の頭の東側に接するように供献されたと考えられる。



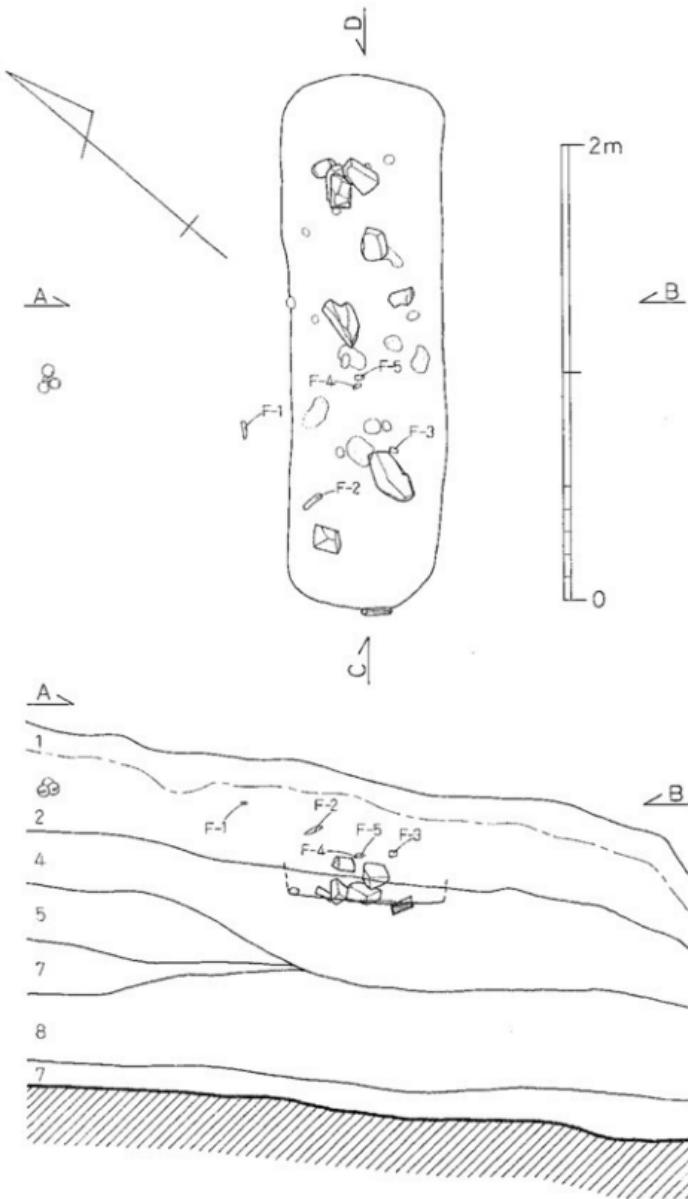
第11図 正崎2号古墳 第1主体実測図



第12圖 正崎2号古墳第1主体断面図



第13図 正崎2号古墳第1主体出土状況



第14図 正崎2号古墳第2主体実測図

〔管玉〕

銅鏡から約20cm西にあった木棺中心線上に6個の管玉が検出された。銅鏡と管玉の間に枕石があり、赤色顔料の付着した床面がこの部分で黒く変色しており遺体頭部の位置を示している。管玉は径15cm程の円周上にあって、ちょうど被葬者が首飾りをかけた状態で埋葬されたと想定される。

〔馬具〕

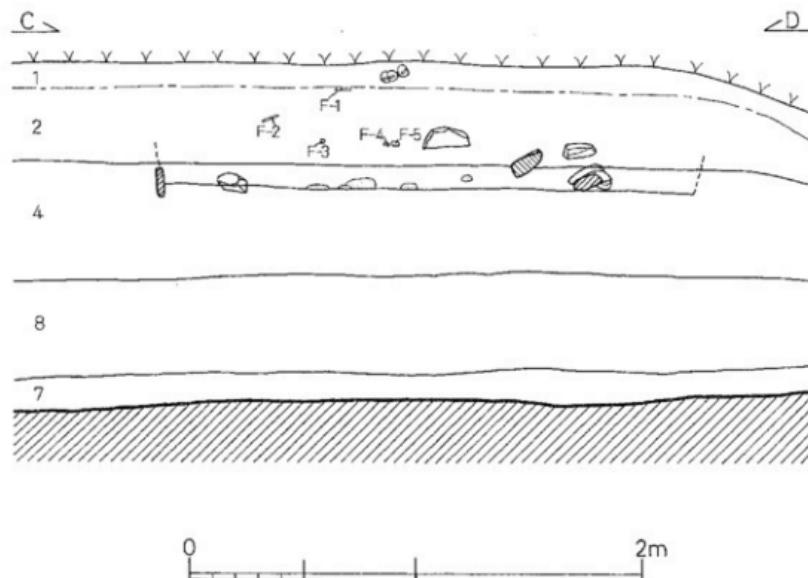
東小口から約70cm南側壁に接して鏡板、引手、辻金具等馬具の一部が検出された。辻金具の下床面に約20cm×20cmの範囲に黒色のウルシ状の謫がみられ、木鞍の置かれていた可能性も考えられる。

〔直刀〕

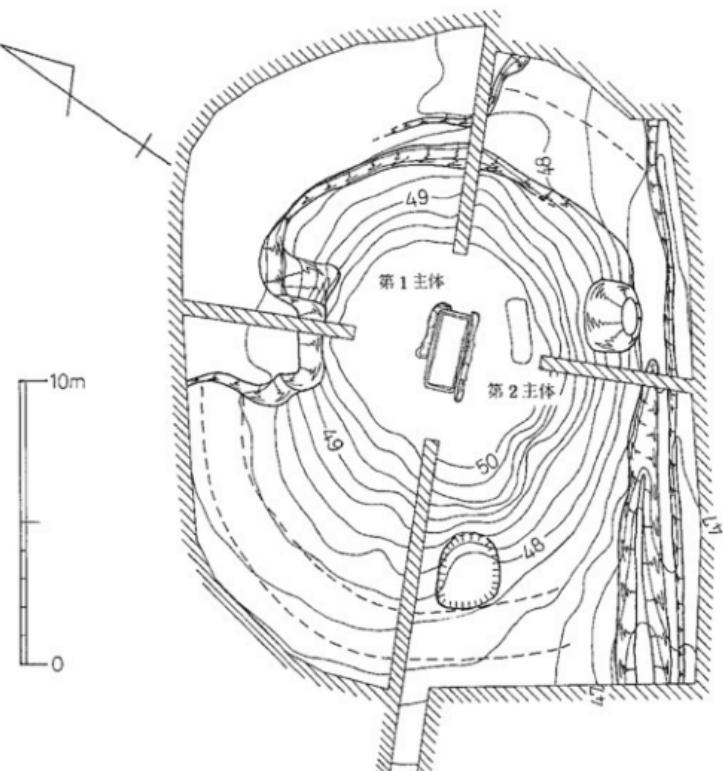
木棺東小口より約110cm、棺のほぼ中央部から西へ鋒を向けた直刀1本が検出された。中心線の北側よりに木棺と平行して置かれている。直刀の背を南側にして鋒は西小口約50cmの所で、棺台の石の上にある。6ヶ所に折損はあるが全形を保っている。被葬者の遺体下半身にそうように供獻されていた。

〔剣〕

直刀とはば平行して南側に置かれている。長さ約90cm、巾6cmの剣で遺体の下半身南側に供獻されていた。



第15図 正崎2号古墳第2主体断面図



第16図 正崎2号古墳調査後墳丘外形図

〔甲冑〕

木棺西端部に鉄製短甲が検出された。胴を横向きにして木棺西小口より外へ張り出すように置かれている。棺外か棺上に置かれた可能性が考えられる。復元の過程で、短甲の中に胄が入っていたことが判明した。目下復元整理中である。

〔三環鈴〕

棺外の副葬遺物として銅製の三環鈴が検出された。第1主体木棺中心線より約90cm南東小口より位置し、墳頂現表土下約25cmの浅い所から出土した。三個の鈴の南側がやや低くわずかに傾斜した状態で、伴出物はなく、周辺に何らの施設も認められなかった。第1主体の副葬品と思われるが、木棺床面の高さと比べると85cmの差がある。おそらく木棺を土で覆ったあとこの位置に置かれ、さらにその上に墳丘盛り土がなされたと推定される。

### 〔その他〕

上記のほか、鉢状鉄器、鉄劍、鐵鎌、辻金具、鏡、なども検出されている。鏡は木棺に使用されていたものである。また短甲の中に入り込むように土師器が一点出土している。須恵器は全く認められなかった。墳丘埋土中から多量の弥生式土器片が出土したが古墳築造の盛り土に混じったものである。

### 第2主体

墳丘頂部の東南隅に土塙幕状の埋葬主体1が検出された。第1主体中心部から南へ約2.6mの距離にある。床面の長さ約2.35m、巾65cm程度と推定される。長軸中心線は北50度東を指している。

墳頂平坦部から墳丘斜面へ向う肩部にあたり、現表土のすぐ下に床面が検出された。したがって土塙掘り込み、側壁部分は確認できなかったが、床面にはわずかながら赤色顔料の付着があり、朱の付着したブロック状の粘土と、枕石状に配置された石と、副葬品と思われる鉄器5点が検出されたことなどから、埋葬主体と推定した。鉄器は床面上方の埋土中からの出土で、腐蝕が著しく小破片であるため原状は不明である。

### 4. 出土遺物

本古墳の葬送とともになう供獻遺物はかなり豊富である。一覧表に示し簡略な説明を付した。なお、一部の遺物については現在復元実測中であり精査のうえあらためて報告したい。

正崎2号古墳出土遺物一覧表

種類	数量	備考	種類	数量	備考
鉄鎌	45		鉄劍	2	
鉄鎌	1		三環鏡	1	銅製
銅鏡	1	画像鏡	鉄鉢	1	
玉類	6		鏡	11	
馬具	12	鏡板・留金具	甲冑	2	短甲1・冑1
直刀	1		土師器	1	

#### (1) 鉄鎌 (図22)

一括して検出された尖根式鉄鎌約40本と、平根式鉄鎌5本である。尖根式は鋒化が著しく、密着した状態で個々の計測はできないが、ほぼ均質の規格品である。全長約18cm、鎌身長約3cm、籠被長約9cm、茎長約6cm程度である。平根式は、一辺約5cmの正三角形状であり、鋒化折損して茎部はほとんどない(第22図)。一点はやや大きく鎌身長8.5cm籠被との間に三角形の透しがある特殊な形状である。



第17図 正 崎 2 号 古 墳 出 土 銅 鏡

(2) 鉄 鋏 (図22)

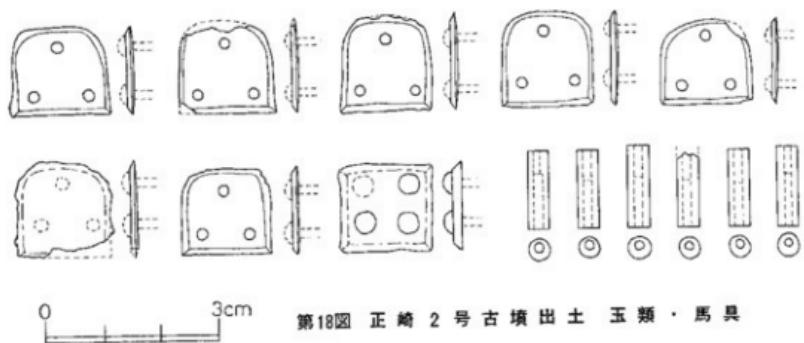
鋳化は著しいが完形を保っている（第22図）。鍛造で、長さ約15.5cm、中央部巾2.5cmを測る。柄を付ける基部は端を約1cm直角状に折り上げている。刃はゆるく内湾し、先端が鉤状にまがる。断面は三角形を呈し、背は約5mmの厚さである。

(3) 銅 鏡 (図17)

青銅製三角縁の彷彿画像鏡である（第17図）。真円で径21.4cm、縁の厚さ約1cm、鏡面は凸レンズ状を呈す。青銹があるが保存状態はよく、完形である。背面には若干の赤色顔料と木質、織布痕が付着している。全面に青銹があるが文様はわりに鮮明に見える。外区に鋸歯文帯、波文帯、櫛目文帯があり、銘文はなく、内区には4個の乳があり三体の神仙が対称的に刻まれている。その間に2体の靈獸と対称する鳥獸が画かれている。鉢は半円球体の素円鉢である。類似のものに田中琢著古鏡66の鏡がある。図柄は殆んど同じであるが、部分的に相異する。

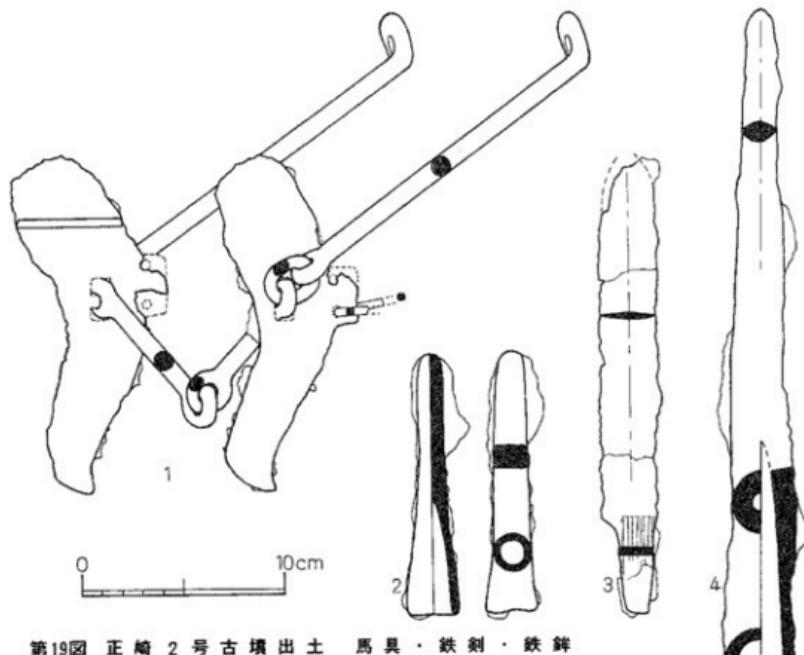
(4) 玉 頸 (図18)

管玉6点である（第18図）。表面は光沢のない灰緑色を呈しもろい材質である。形状は均一で、



第18図 正崎2号古墳出土 玉類・馬具

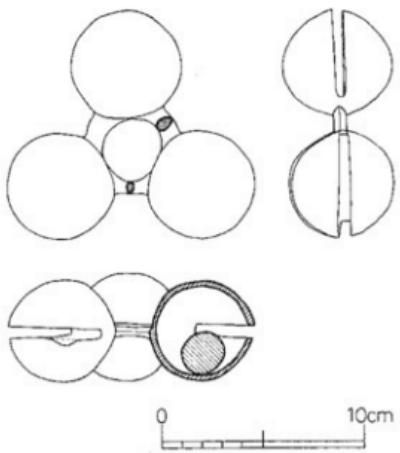
長さ1.4cm、径3.5mm、孔径は両側とも約1mmである。遺体の頸部とみられるところより検出されおり頭飾りと考えられる。



第19図 正崎2号古墳出土 馬具・鐵劍・鐵鉢

### (5) 馬具(図18・19)

鉄製鏡板一対(第19図1)と留金具8点(第18図)、釦具とみられる小片が出土



第21図 正崎2号古墳出土 三環鈴

している。鏡板はF字形で長さ約16.5cm, 中央部巾4cm, 厚さ3mmである。引手は約19cmが遺存する。留金具は1.5cmの四角で一方に丸みをつけている。鉢穴3~4個があいている。

#### (6) 直刀 (図20ノ2)

銹化が著しく折損しているが、全形を残している(第20図2)。全長104cm, 刀巾3.5cm, 茎部長20cmを測る。関部、目釘孔は銹で明瞭でない。刀身断面は二等辺三角形を呈し背の厚み1cmである。全体に木質が遺存していることから鞘に納めて供獻されたものと考えられる。

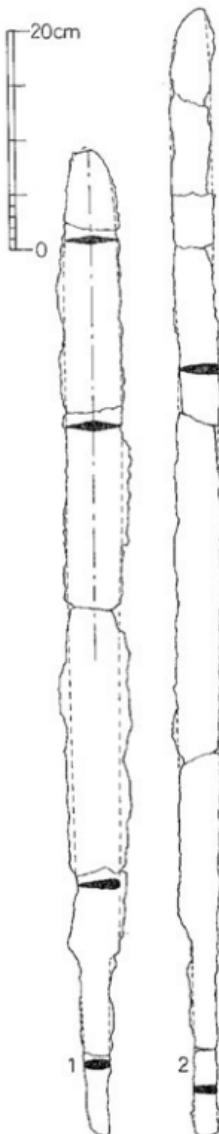
#### (7) 鉄劍 (図20ノ1)

1. 銹化が著しく折損しているが全形を残している(第20図1)。全長90.5cm, 巾5cm, 身部の断面はうすい菱形を呈し、鍔の厚さ約1cmである。茎部長17cm, 巾2.5cm, 断面は長楕円形となっている。関部、目釘孔は銹化して明瞭でない。全体に木質が遺存し鞘に入っていたと推定される。

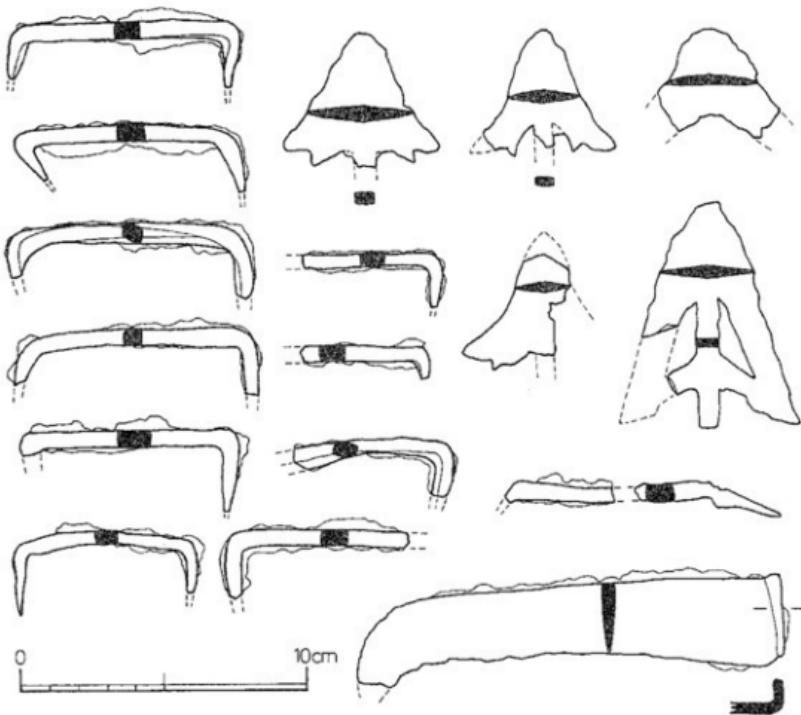
2. 銹化が著しく折損しているが全形を残している(第19図3)。短剣で全長24.5cm, 巾2.8cm, 身部の断面はうすい菱形を呈する。茎部長5cmで木質が遺存する。

#### (8) 三環鈴 (図21)

青銅製铸造の完形品である(第21図)。表面は光沢のある美しい青緑色をしている。環は円形で鈴の付け根がやや歪んでいる。内径



第22図 正崎2号古墳出土  
(鐵劍・直刀)



第22図 正崎2号古墳出土 鐘・鐵鐘・鐵環

約3cm、巾約1cm、厚さ6mmで断面は平たい楕円形を呈する。三方のうち一方は巾6mmと細く断面楕円形となる。

三個の鐘はほぼ同大で、径約5.5cmの球形である。切り口は巾約5mmで環の付け根ちかくまである。中に指頭大の小石が入れてあり動かすといまも美しい音色を発する。環鐘は一般的に馬具とされているが、本古墳の出土状況、実際に鳴ることなどから考えて、埋葬儀礼に鐘を鳴らした可能性も考えられる。類似するものに愛知県志段味大塚古墳出土の環鐘がある。

#### (9) 鐘 鐘 (図19/4)

1. 鎹化が著しく折損しているが、全形を残している(第19図4)。鍛造によるつくりで、全長38.2cmの刺身形鐘である。身部の長さ23cm、袋部から鐘に向ってしだいに細くなり先端は鋭くとがって細身の槍を思わせる。断面は菱形を呈し巾1.7cm、厚さ1cmを測る。袋部は円筒形、断面は円形で内径2.3cm、木製の柄のつく形態を示している。

2. 鎌化が著しく計測は明瞭でないが、内径2cmの円錐形の袋柄となっている(第19図2)。全長13.4cmと短く、袋部から漸次細くなり先端はまるくなっている。袋部の長さ約6cm、断面は楕円

形を呈する。鉢または槍の石突きと考えられる。

#### (10) 錐 (図22)

鉄製錐11点が出土している。巾約1cm、厚さ5mm程の扁平な鉄材をコの字形に折りまげたつくりで、背部長6cm~8cm、爪部長1.5cm~2cm程のものである。爪部に木質を遺存することから、木棺組み立てに使用されたと考えられる。

#### (12) 甲 胴

鉄製の短甲と胄が出土している。銹化が著しく土圧により押しつぶされた状況であるが復元可能である。現在、臼井洋輔氏に復元を依頼している。鉄横矧板革綴短甲と肩庇付小札鉄留胄である。復元後あらためて報告する予定である。

### 第3節 ま と め

1. 本古墳は、標高約50mの丘陵尾根上に立地する円墳である。
2. 古墳の規模は、径約20m×16m、高さ約2.5mを測る。
3. 周溝、葺石、埴輪など外表施設は認められない。
4. 本古墳の主体は、中心となる木棺直葬1主体と、墳丘上に床面をもつ土塙墓1主体である。
5. 出土遺物は、銅鏡、三環鈴、鐵劍、直刀、甲冑その他豊富である。
6. 築成年代は明確でないが、古墳の形状、内部主体、出土遺物などから前期古墳（5世紀代）と推定できる。

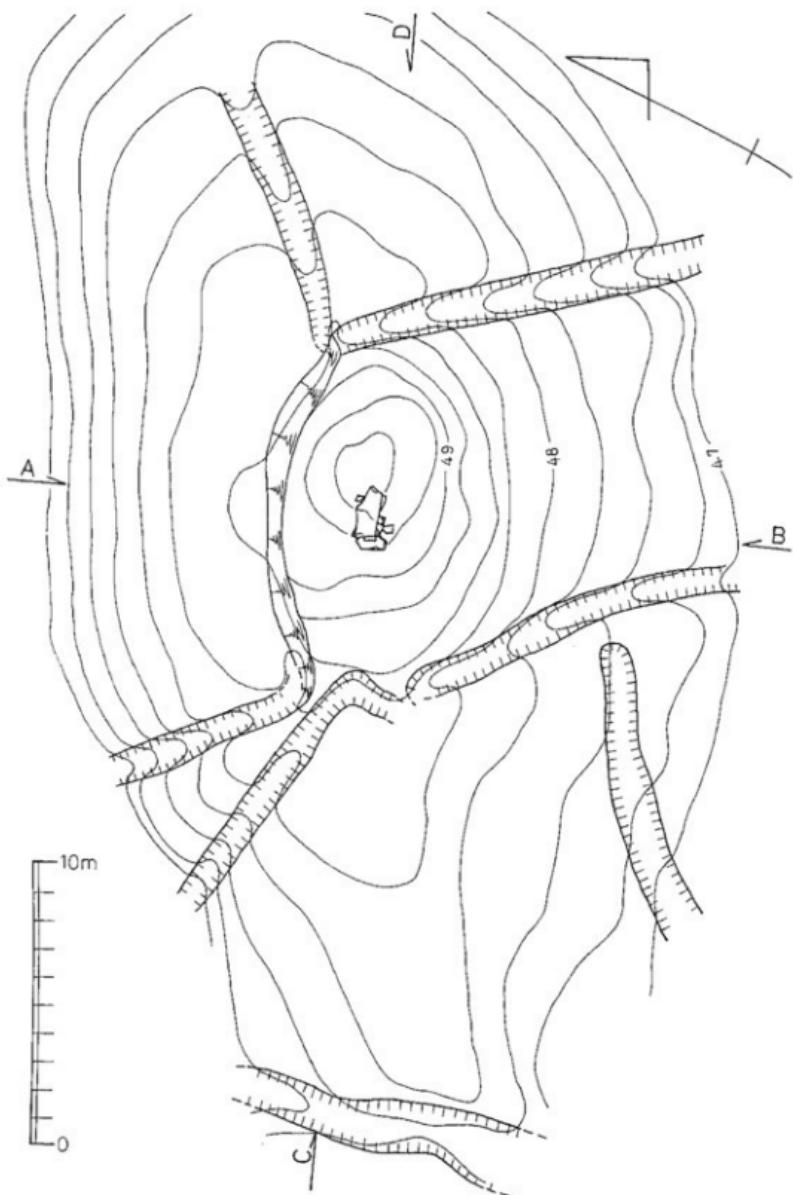
## 第4章 正崎4号古墳

### 第1節 立地と調査前の概況

正崎4号古墳は、岡山県赤磐郡山陽町正崎字浦山1360番地の丘陵上に所在する。昭和62年7月20日から同年10月30日に至る期間発掘調査を実施した。

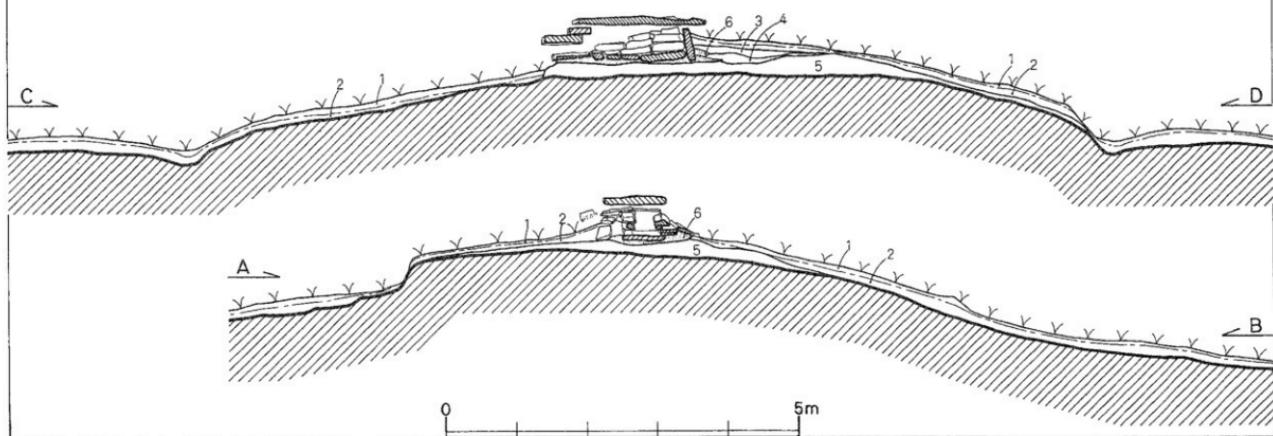
本古墳は、正崎2号古墳の西方約115mの丘陵尾根上に立地する。標高49.5mで周囲の眺望はよく、西方を流れる砂川の平地と、丘陵谷間に開けた水田地帯に臨んでいる。眼下の水田よりの比高約30mである。

調査前の古墳周辺は楓、櫻、松、榎などの生い茂る雑木林であった。さらにそのまわりは果樹園として開墾され、桃の木が植えられていた。雑木を伐採して発掘調査を開始する時点で、本古墳は、内部主体の組合せ式箱式石棺を地上に露呈し、盗掘によって大きく破壊された状況であった。石棺蓋石の上に牛神様の祠が祀られ地区の人々の信仰の対象であった。

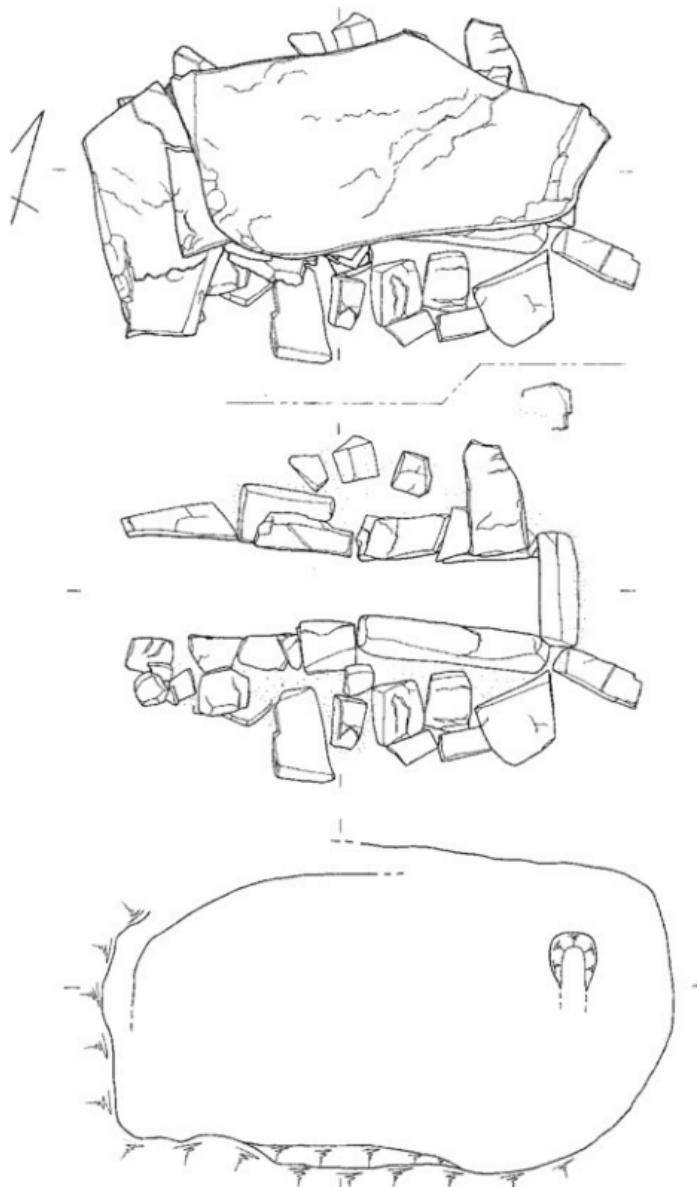


第23図 正崎4号古墳調査前外形状図

- 1. 表土
- 2. 表土
- 3. 灰褐色土
- 4. 灰色土
- 5. 褐色土
- 6. 主体部粘土



第24図 正崎4号古墳埴丘断面図



正崎 4 号古墳主体部実測図

## 第2節 調査の結果

### 1. 墳丘の規模と外形

本古墳は、丘陵尾根上の自然の高まりを利用して整形し築造された小円墳である。その規模と外形については調査後も判然としなかった。今回発掘調査を行ったときには、すでに墳丘盛り土部分はほとんど流失し、開墾による排水溝、墳端部削平などがあり、さらに中心主体の石棺も盗掘されており、その外形は大きく破壊されていた。また、墳域を示す周溝、葺石、墳輪など古墳の外部施設は全く認められなかった。

実測の結果により、すでに露出していた石棺を中心として本古墳の規模外形をみると、尾根走行にやや長い楕円形を呈し、東西約13m、南北約10mを測る。盛り土がほとんど流出した現状で墳丘の高さ約1.5mであり、石棺の基底部から墳丘盛り土部分を推定すれば本来は墳丘の高さ約2.5m程度であったと考えられる。

墳丘の築成は、丘陵尾根上の自然の高まり（約2m）を利用していている。丘陵頂部を削平整地して約5m程度の平坦部をつくり、その中央に内部主体となる組合せ式箱式石棺を構築している。墳丘基盤となる丘陵地山は黒雲母花崗岩の雑乱土である。現況では墳丘盛り土は流失して殆んどなく、地山が表土面となっていた。墳丘基盤上に構築された石棺から推定して約1m程度の盛土をもって墳丘が築成されていたものと考えられる。

### 2. 埋葬施設

本古墳の内部主体は、墳丘中央部に尾根走向と平行して構築された組合せ式箱式石棺1主体である。調査以前に盗掘された石棺全体が地上に露呈した状態で、石棺の蓋石、側石、西小口石とも原状をとどめないほど大きく破壊されていた。しかし東小口石、側石基礎部分、敷石等はほぼ原形をとどめていると考えられた。石棺の長軸中心線は北70度東を指している。

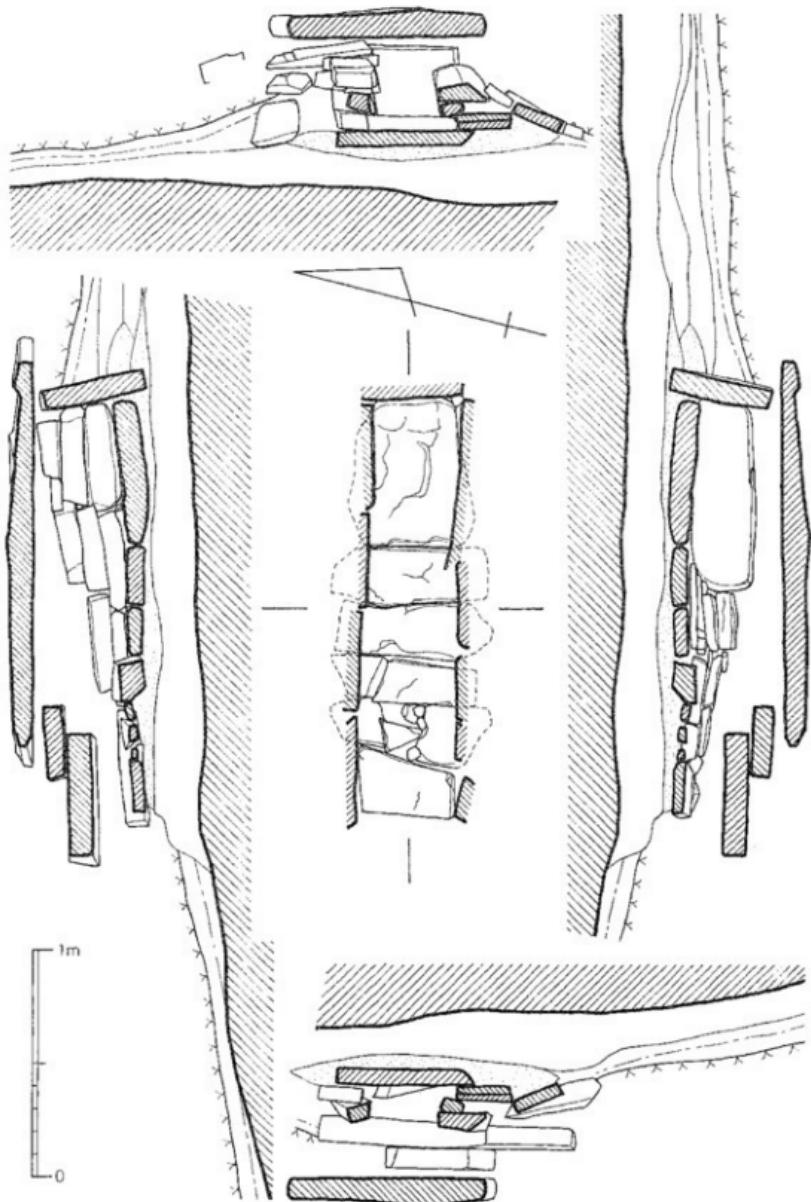
石棺に使用された石材は、当丘陵付近に産出するもので、側石、小口石、敷石等は黒雲母花崗岩、花崗斑岩、蓋石は花崗閃緑岩である。（石質は奥田尚氏のご教示による）

石棺蓋石は、大小2枚の板状の石が使用されており、大きい方は、長さ180cm、巾90cm、厚さ約10cmの自然石である。小さい方は長さ50cm、巾120cm程の割り石である。ともに盗掘の際動かされず原位置でない。

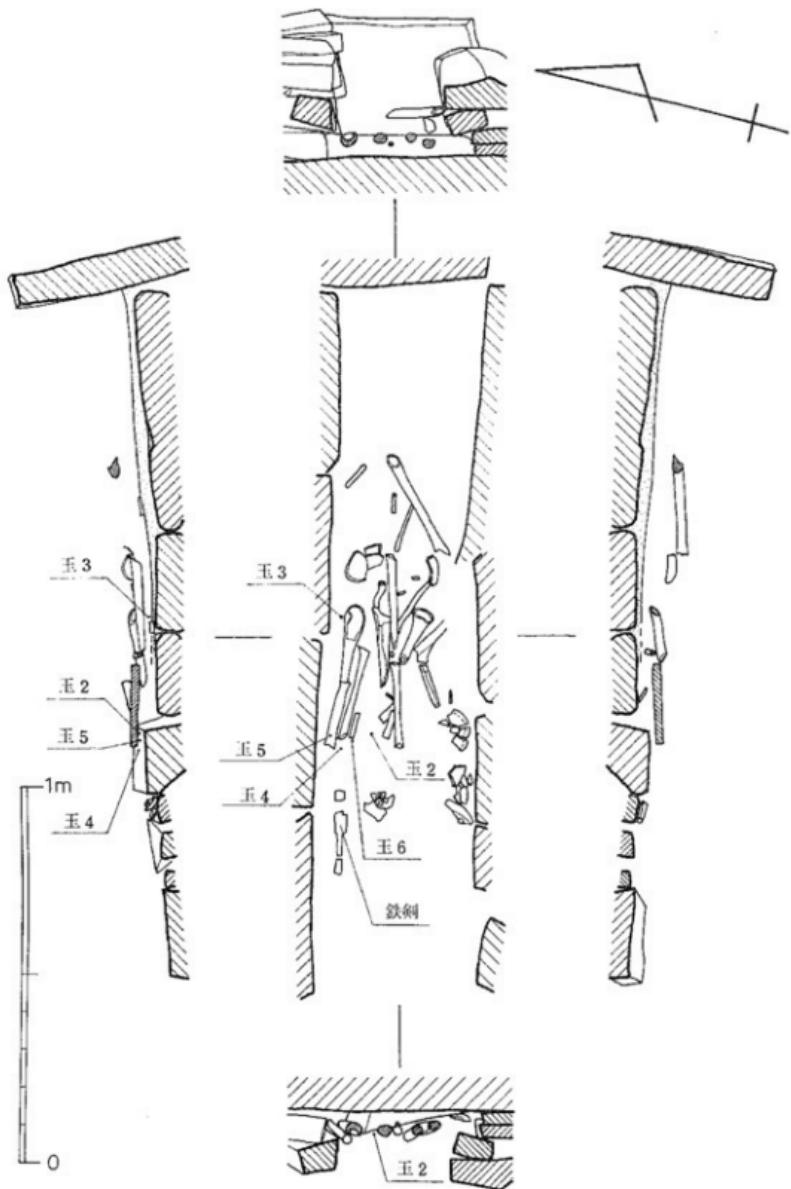
石棺の構築は、墳丘基盤となる地山整地面に、長さ約2.5m、巾約1.2m、深さ約20cm程度の掘り込みをつくり、（第26図）粘土を置いた上に東小口石（高さ45cm、巾50cm、厚さ10cm）を立て、内側に側壁の石を積んで石棺を構築している。

側壁は、南東の1個だけが一枚石で（長さ80cm×高さ30cm）あと数十個の小さな割り石を小口積みに組み合わせた構造である。組み石の縫ぎ目には粘土の目張りが施されていた。（盗掘のため殆んど破壊された状況である）

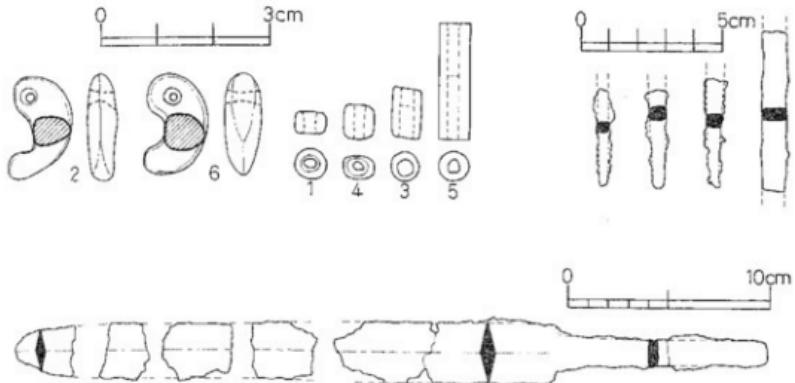
石棺の規模は、西側の小口石がないため正確な計測はできなかったが、推定を加え、石棺内法長約180cm、床面での内法巾約40cm、深さ約30cm程度と推測できる。



第26図 正崎4号古墳主体部実測図



第27図 正崎4号古墳 主体部遺物出土状況



第28図 正崎4号古墳出土遺物 玉類・鉄器

石棺床面はやや原形を保っており、6個の敷石のうち4個は原位置にあると思われた。床面は東部がやや高く西に傾斜している。原状を保つ東部敷石の上に約2cm程度の粘土質の土が堆積しており、敷石の間に粘土の目張りが施されていた。

### 3. 出土状況

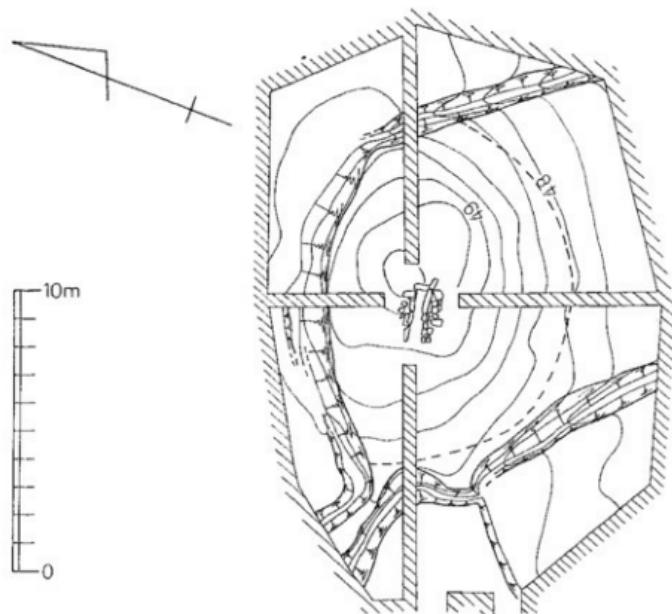
石棺内部は盜掘により大きく破壊されており、蓋石や側壁の隙間から入りこんだ木の根や木の葉、瓦、土砂などが混入し、擾乱された状況であった。それらのものを取り除き、床面近く掘り下げたところ、人骨、鉄器、玉などが検出されたが、いずれも盜掘によって擾乱されたものようである。人骨は石棺中央部に寄せられた状況で、頭蓋骨と手足の骨が入りまぜたまま検出された。東小口石より50cmの位置から頭蓋骨の一部が検出され、さらに中央部からもあご、歯などが出土した。擾乱によるものか、あるいは二体の埋葬があった可能性も考えられる。（人骨の鑑定については専門家に依頼する予定である）

人骨のほかに、鉄器小破片約20点が検出されたが、いずれも擾乱された状態であり原位置は確定できない。鉄剣、鉄鎌の一部分である。玉類は6点が検出されたが原位置は不明である。勾玉1は掘り起された敷石の間から、小玉1は西小口石とみられる付近の棺外から出土した。その他土器片が検出されたが後世のものである。

### 4. 出土遺物

本古墳の葬送にともなう供獻遺物はきわめて簡素である。墳丘外部の埴輪、土器など全くなく、石棺内から検出された玉類6点と鉄器小破片（約20片）のみである。本古墳の被葬者と考えられる石棺内の人骨があるが先述したように専門家の鑑定を得て報告する。

#### 玉類（図28）



第29図 正崎4号古墳調査後墳丘外形図

本古墳出土の玉類は(第28図), 勾玉2, 管玉2, 小玉2の6点である。

勾玉2点は硬玉製, ほぼ同じ大きさで長さ1.8cm, 頭部巾8mm, 厚さ5mmを測る。穿孔は両側から行なわれている。管玉は碧玉製, (5)は長さ2cm, 径5mm, (3)は一部欠けているが, 長さ8mm, 径5mmである。小玉はガラス製, 6mm×5mmと3mm×5mmの大きさである。

#### 鉄剣(図28)

錆化が著しく, 盜掘によって折損したとも考えられる(第28図)。小片となって出土したが, 断片を合わせて造存する部分は, 茎長10.5cm, 巾1.3cm, 断面長方形を呈する。身部は巾3.5cm, 断面菱形を呈する。長さは不明である。

ほかに鉄器小片があり, 鉄鎌の茎部とみられる3点である。

#### 5. 築成年代

本古墳の築成年代を示す遺物は少なく, それを明確にすることはできないが, 古墳の立地, 外形, 主体部の構造, 創葬品また, 正崎2号古墳など周辺の古墳等総合的に検討して前期古墳と推察できる程度である。

### 第3節 まとめ

1. 本古墳は丘陵尾根上に築成された小円墳である。
2. 古墳の規模は長径13m、短径10m、高さ1.5m程度の墳丘である。
3. 周溝、埴輪、葺石など外部施設をもたない。
4. 内部主体は組合せ式箱式石棺である。
5. 出土遺物は人骨、玉類、鉄器等である。
6. 築成年代は明確でないが、一応前期古墳と推定できる程度である。

## 第5章 浦山遺跡

### 第1節 立地と調査前の概況

浦山遺跡は、正崎字浦山に所在する。正崎2号古墳の立地する丘陵尾根稜線から北側の民潤池に臨む斜面である。試掘第3区の東部で（第6章第3節参照）確認調査の結果、厚い土器包含層と土器溜りが検出されたことから、全面発掘調査を実施することになった。

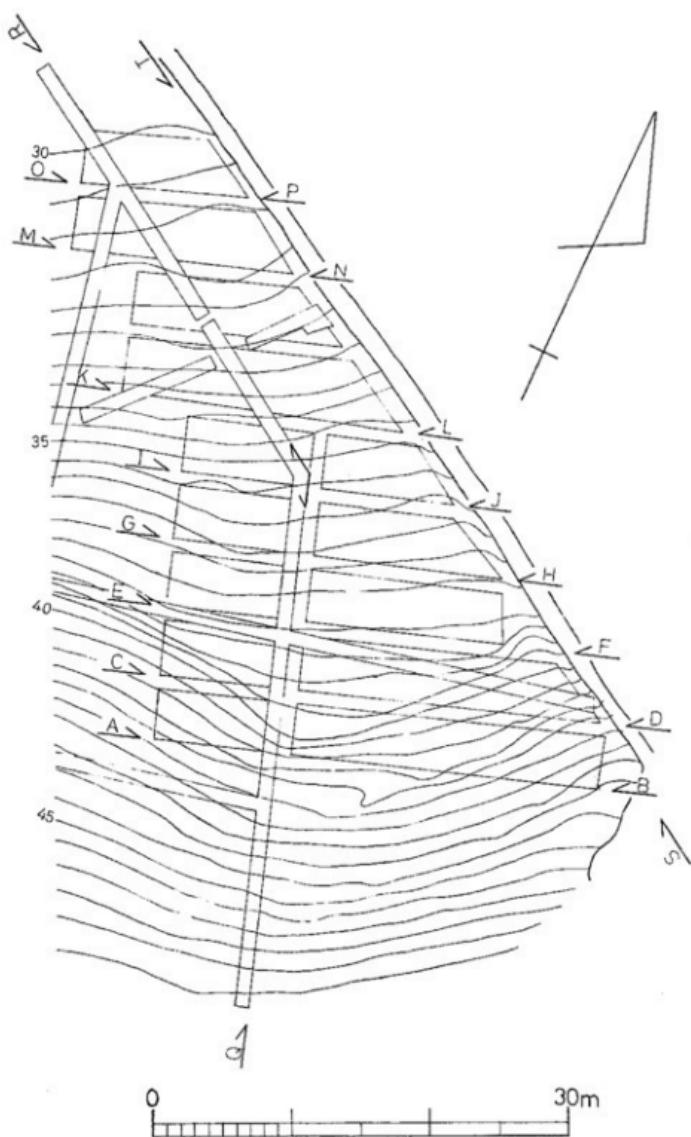
### 第2節 調査の結果

試掘調査によって検出された土器包含層の堆積する範囲、南北約70m、東西約40m、面積約1,400m<sup>2</sup>の遺跡に4m×4mのグリットを設定して調査を実施した。

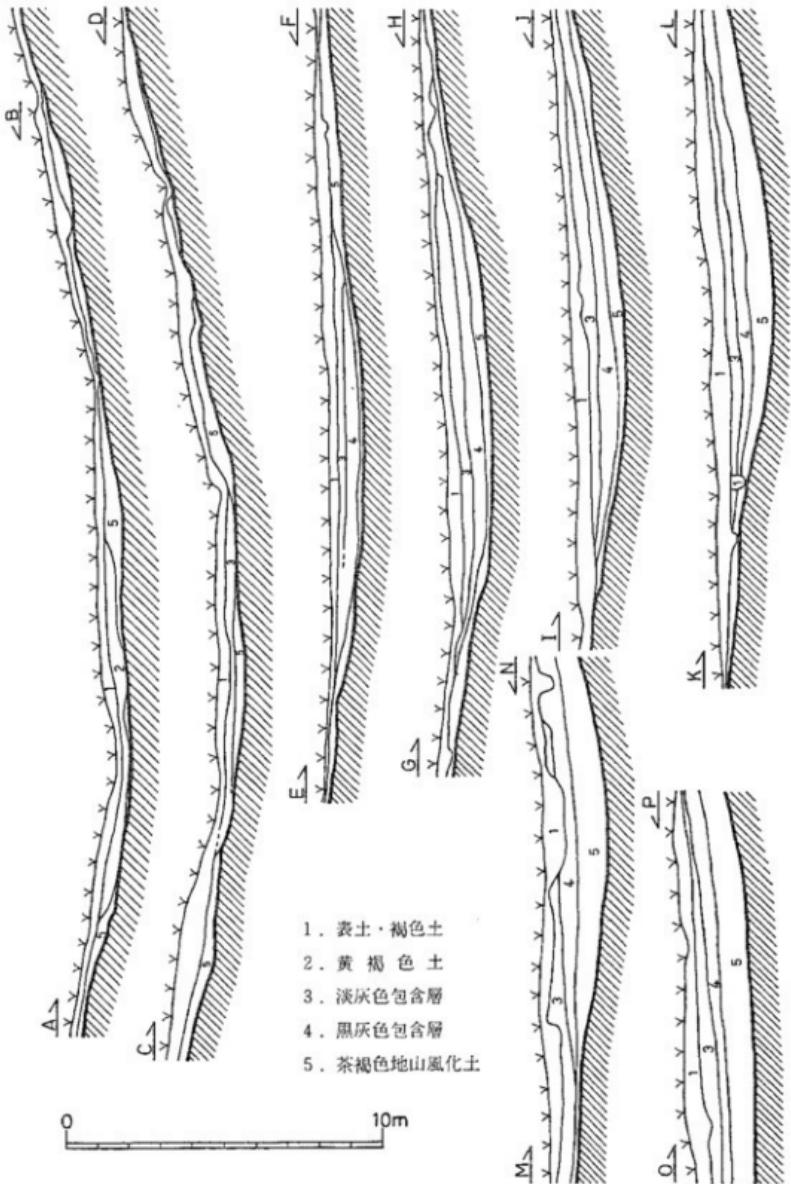
土器包含層の状況を（第32図QR）南北縦断面図によって観察すると、斜面上端（南）の基点（標高42m）から約20m下方付近までは、表土と耕土で堆積層はほとんどなく、約40cm程度地山基盤に達する。20m以降、堆積は徐々に厚くなり、30m～50m付近は平均約1.6mの堆積である。表土・耕土の褐色・黄褐色土層の下に淡灰色の包含層約50cm（第32図3）があり、須恵器、土師器が出土する。さらにその下に黒灰色の包含層約50cmがあり（第32図5）、多くの弥生式土器を含む。最下層は茶褐色の地山風化土で遺物を全く含まない。（第32図5）以上堆積層と包含層の状況である。

発掘は、遺跡上方（南）から漸次下方に進めていった。各グリットごとに表土、耕土、包含層と層序を追しながら平面的に掘り下げ、地山層に達するところで終る。各層ごとに造構の有無を確認した。特に土器溜り周辺は注意して発掘したが、住居址等の造構は確認できず、未発掘の東方丘陵斜面から流入堆積した土器溜りと推定された。

3か所から土器溜りを検出したが、X-2（第38図）・X-3（第40図）は範囲もせまく量も少いが、X-1（第33図～第37図）は、長さ10m、巾6mの範囲に重なりあった状態で出土した。は

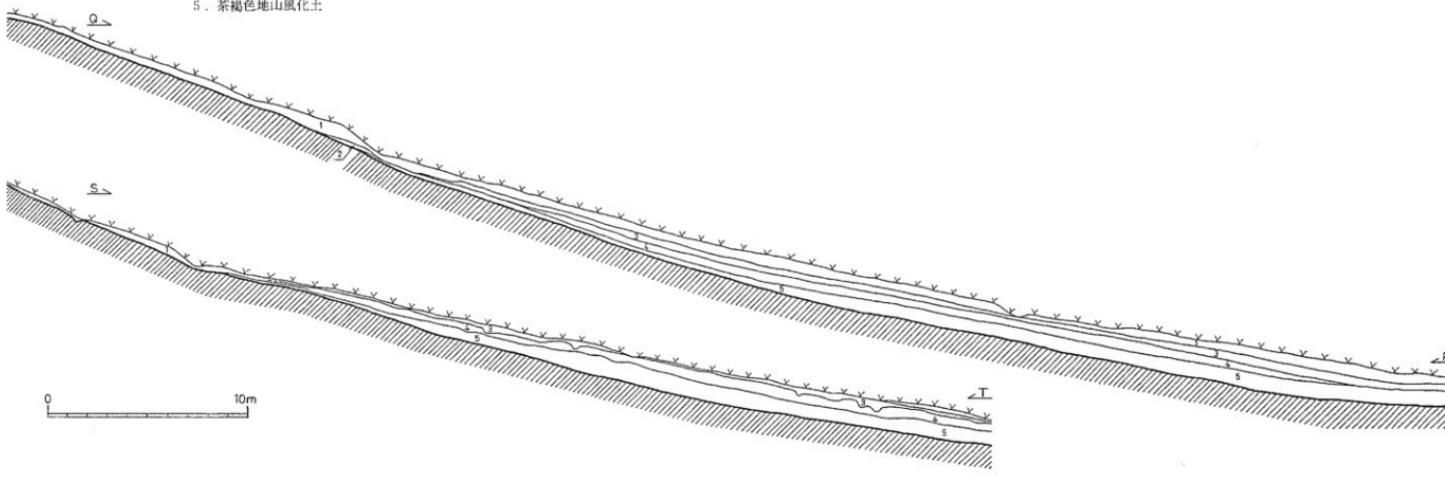


第30図 浦山遺跡調査前外形図



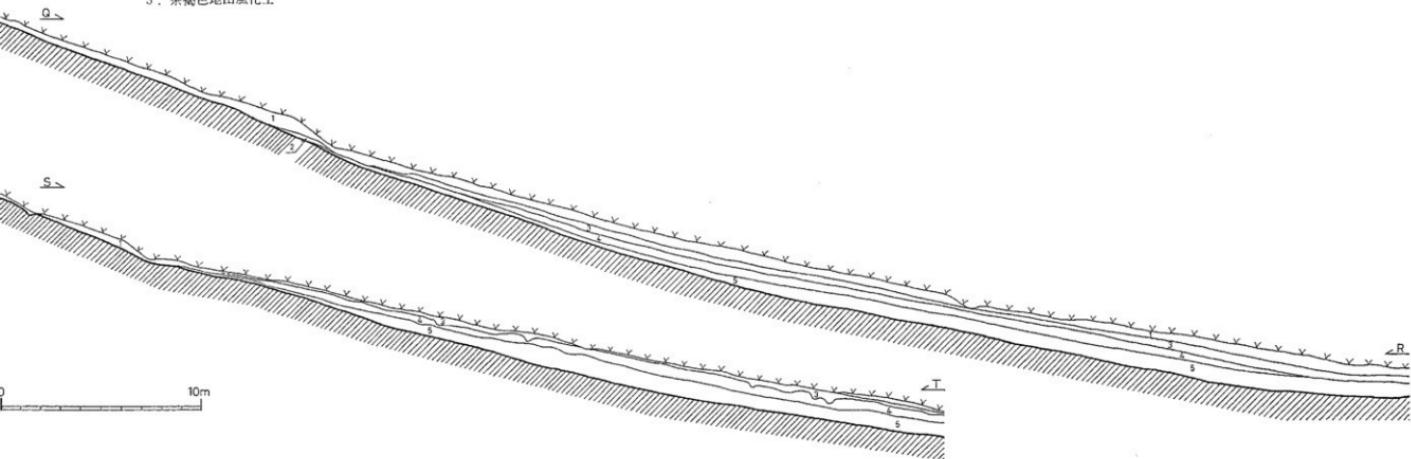
第31図 浦山遺跡堆積土層断面図

1. 表土・褐色土  
2. 黄褐色土  
3. 淡灰色包含層  
4. 黑灰色包含層  
5. 茶褐色地山風化土

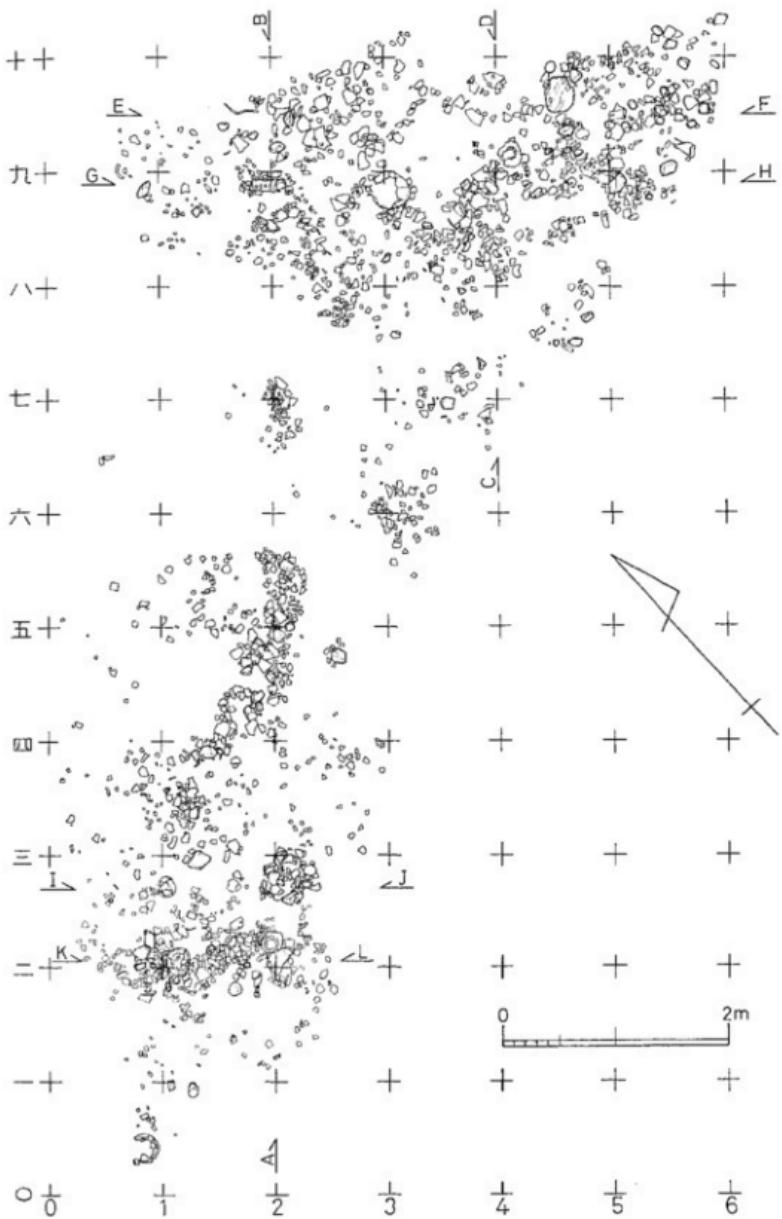


第32図 浦山遺跡堆積土層断面図

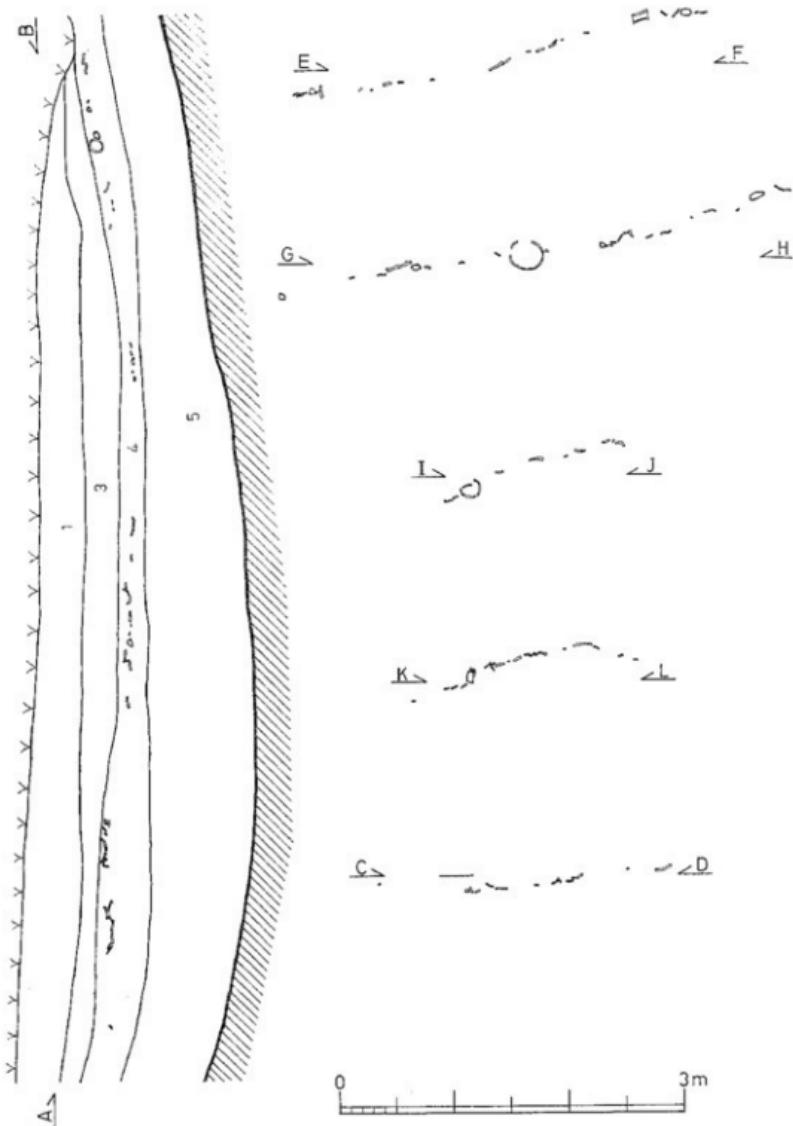
1. 表土・褐色土  
2. 黄褐色土  
3. 淡灰色包含層  
4. 黑灰色包含層  
5. 茶褐色地山風化土



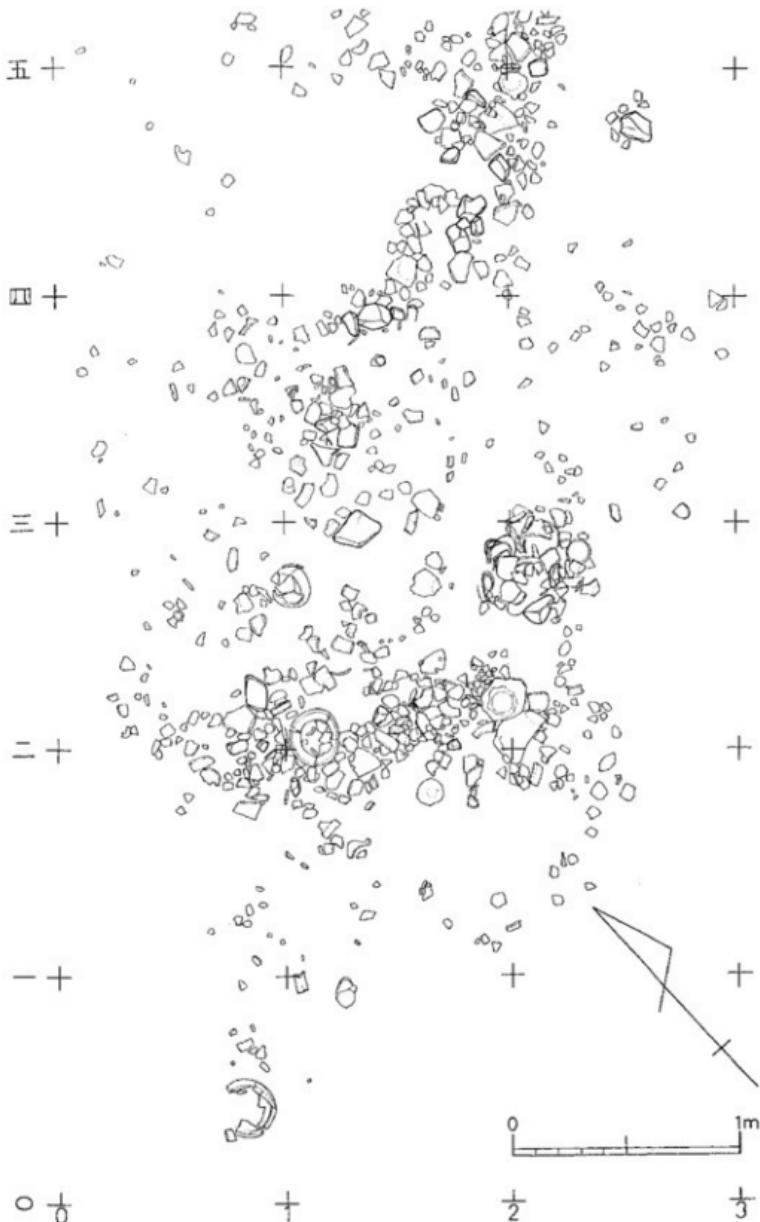
第32図 浦山遺跡堆積土層断面図



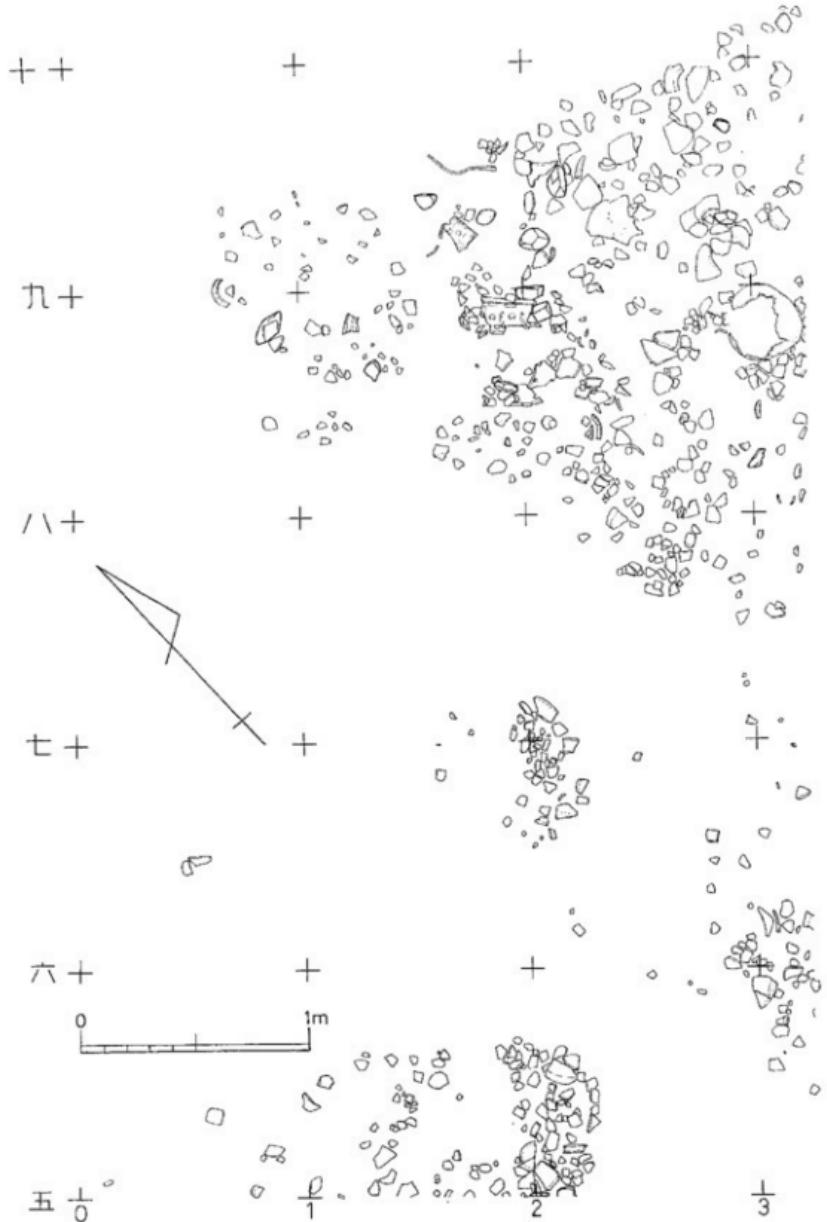
第33図 浦山遺跡土器分布図 全体図



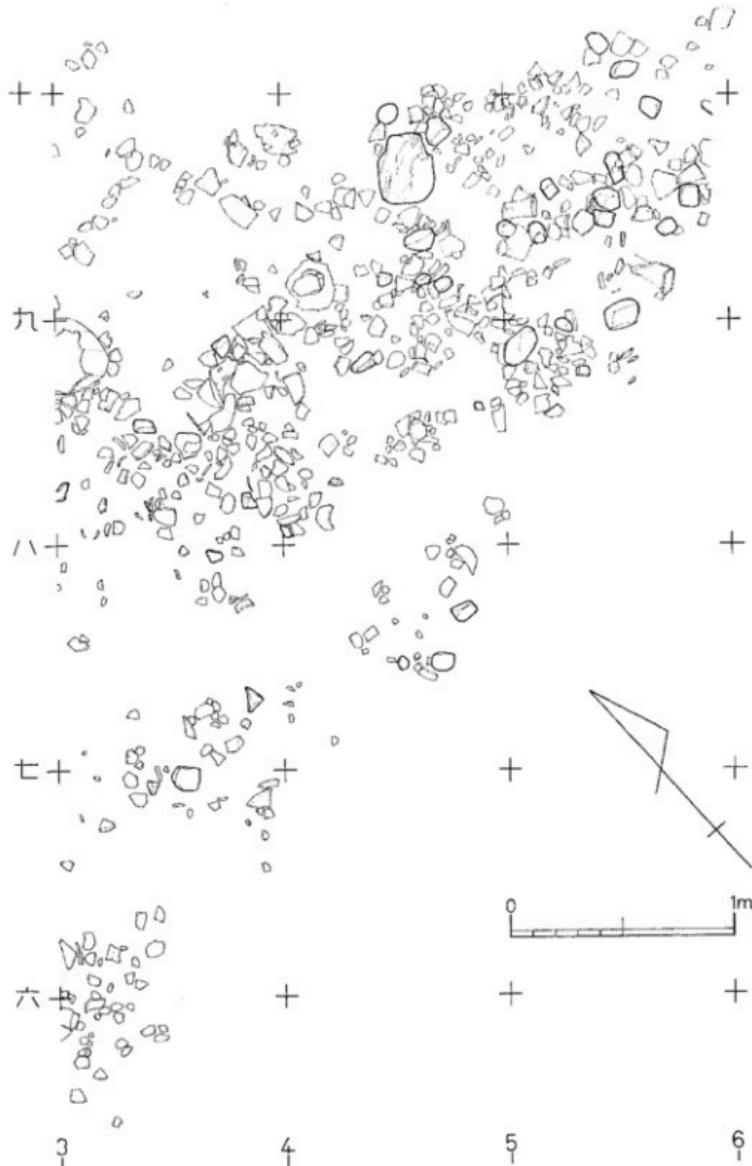
第34図 浦山遺跡土器断面図



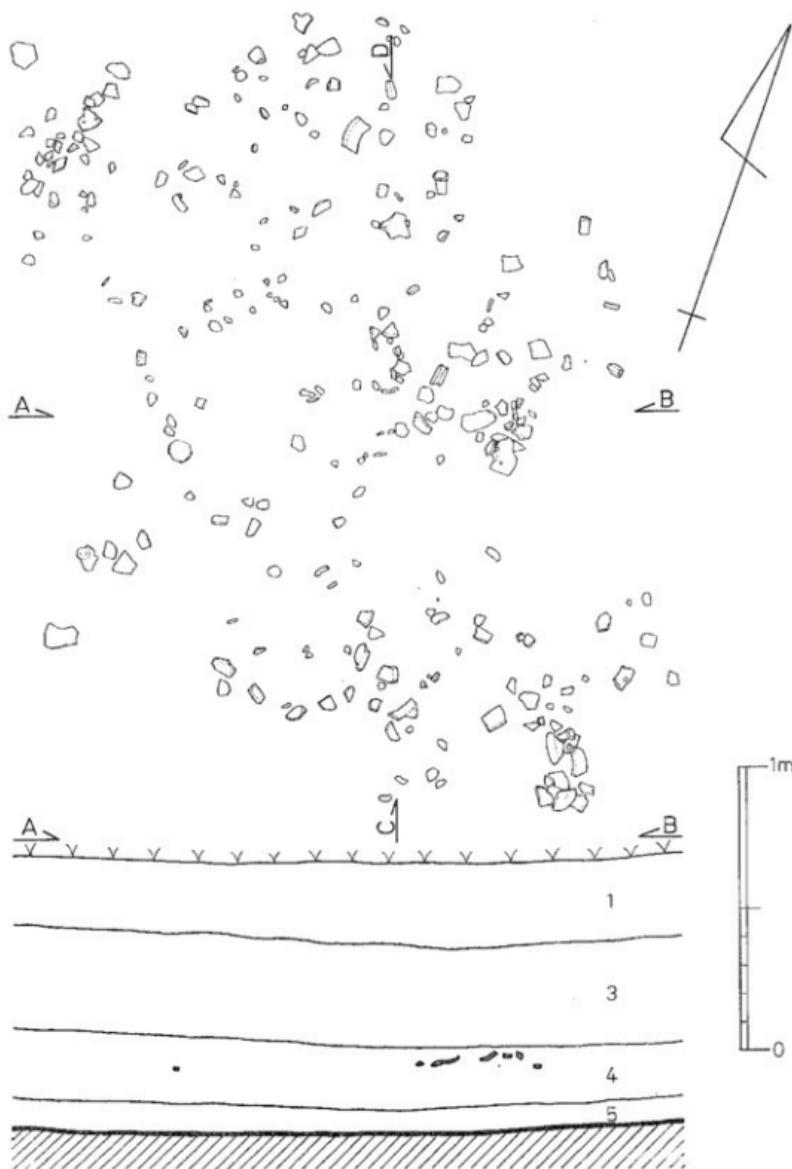
第35図 浦山遺跡土器調査 1部分図



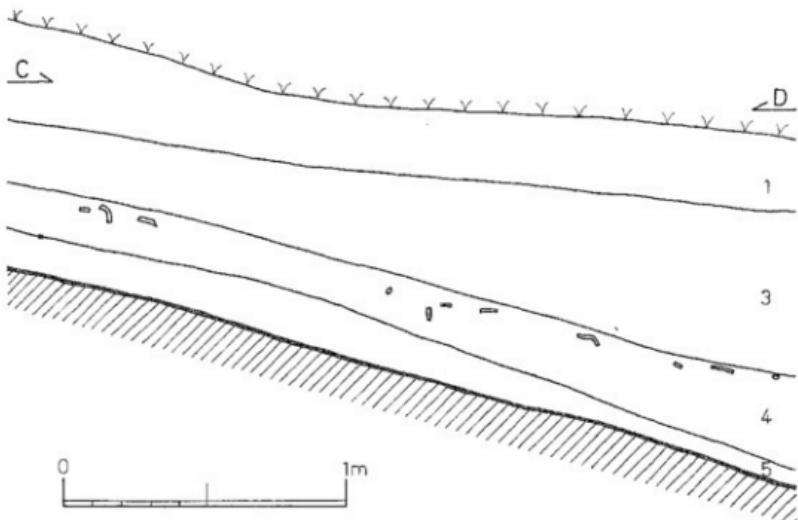
第36図 浦山遺跡土器溝り1部分図



第37図 浦山遺跡土器溜り1部分図



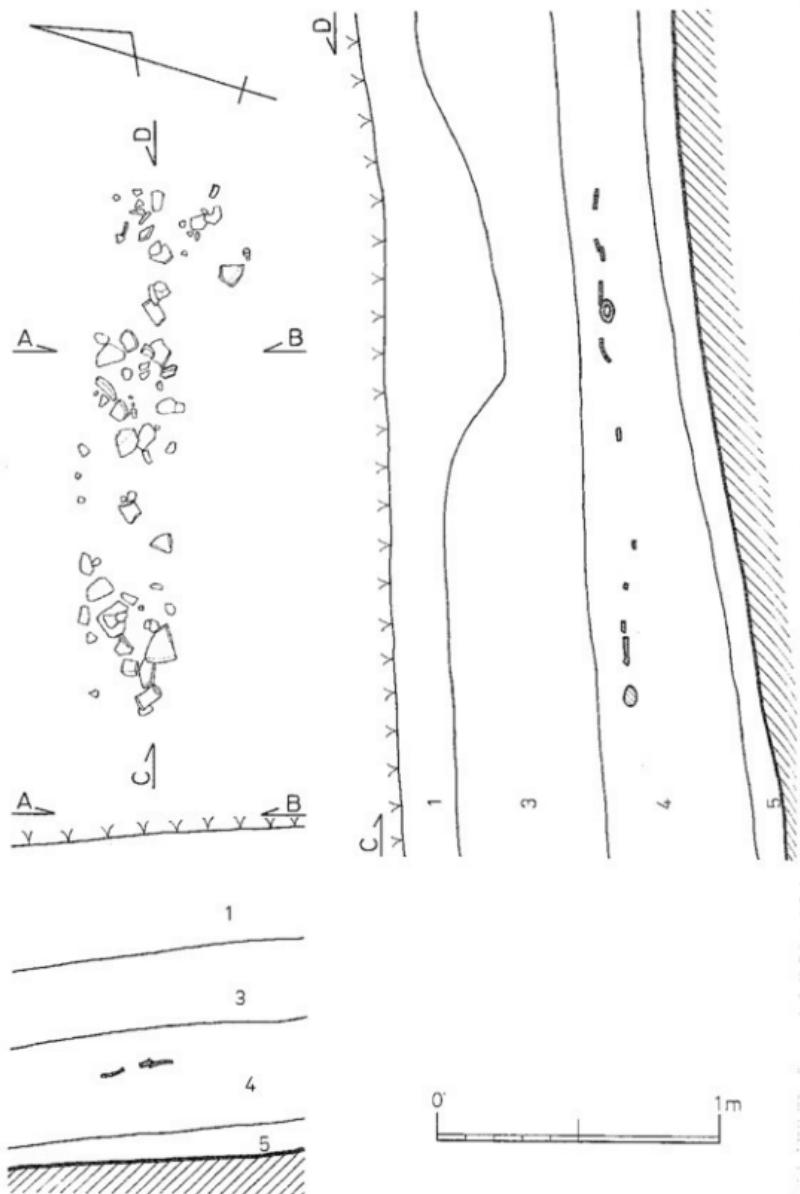
第38図 浦山遺跡土器層り2 実測図

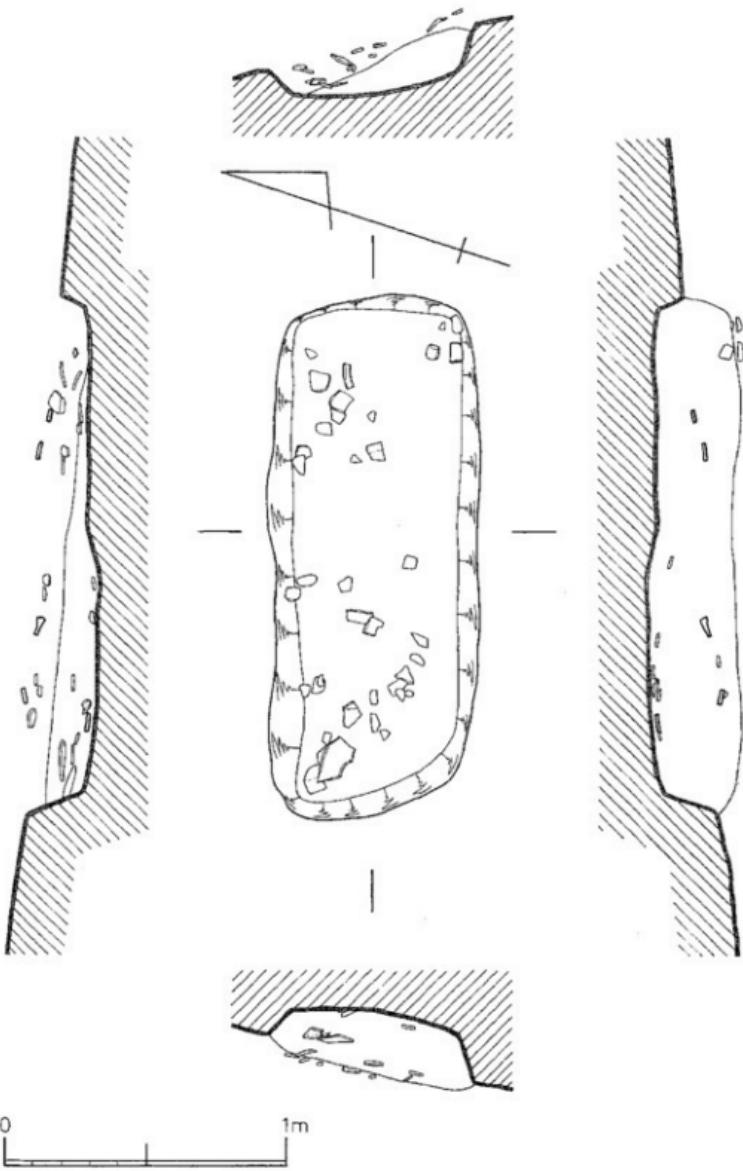


第39図 浦山遺跡土器溜り2断面図

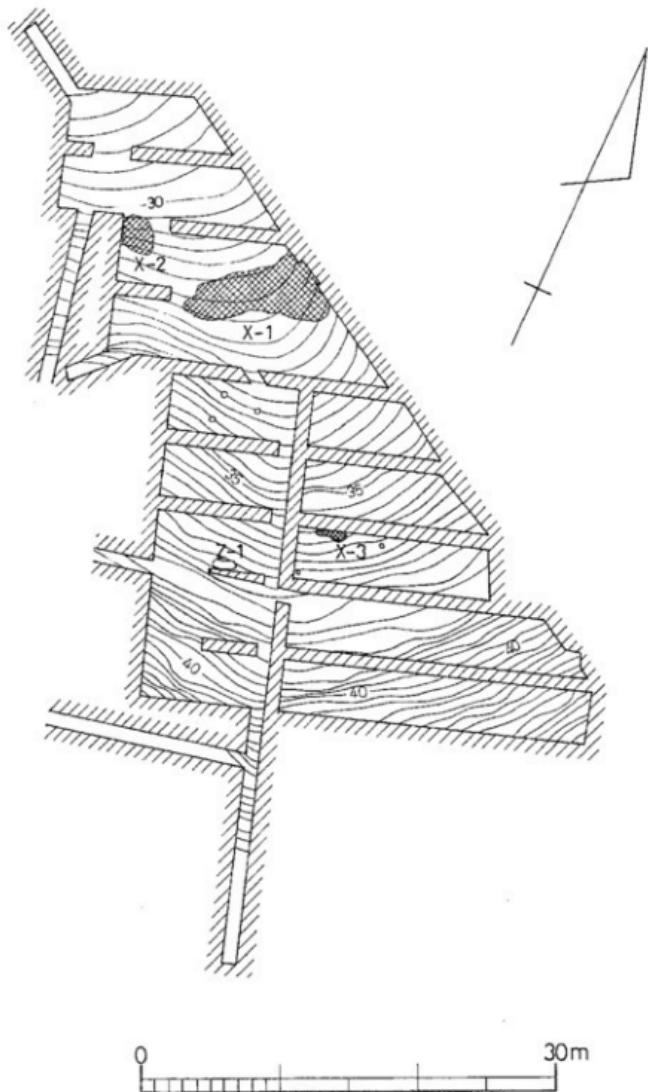
とんど弥生後期に属する土器である。現在復元整理を行っており、稿を改めて報告する予定である。本遺跡の基点より約30m北、中心トレンチのすこし西からピット状遺構1が検出された。（第41図）地山を約20cm掘り込み、長さ約180cm、巾約60cmの長方形を呈する。上部堆積層では切り込みは検出されず、ピット底部の地山掘り込み面のみの遺存である。埋土の中から、石庖丁1と弥生式土器小破片が出土した。なお炭化した小さなドングリの実數十個が検出され貯蔵庫の可能性が考えられる。

浦山遺跡は大量の土器を出土したが、住居址等の遺構ではなく、ピット状遺構1と若干の柱穴状の掘り込み痕が検出された程度で、土器は東側丘陵斜面からの流入堆積ではないかと推定された。現在調査中の出土遺物はあらためて報告する予定である。





第41図 浦山遺跡ピット状遺構実測図



第42図 浦山遺跡調査後実測図

## 第6章 試掘調査の概要と結果

### 第1節 試掘第1区（正崎浦山）

#### （1）調査前の概況

山陽町総合公園造成地内、「試掘第1区」は、正崎字浦山にある。正崎4号古墳の所在する地点から、西方につづく丘陵尾根上と両側斜面の地域で、稜線上約65m、両斜面約20m、面積約1,300m<sup>2</sup>の範囲である。

この地区は、岡山県文化課による事前調査の際、若干の土器散布がみられたところで、丘陵西端部の三角点付近の地形の高まりは、古墳の可能性も考えられるということで、今回の確認調査の対象地区となった。

#### （2）調査の概要と結果

総合公園造成地内の西端部にあたり、正崎4号古墳から西へ国土地理院の三角点標高52.7mに至る間の丘陵線上に、延長約80m、幅1mのトレンチを設定して調査を実施した。

正崎4号古墳から三角点に至る尾根上は、果樹園としてすでに開墾され、表土層ないし耕土層は平均約30cm程度で、その下は地山基盤層である。この地点からの出土遺物はなく、造構も検出されなかつた。

丘陵西端部の三角点付近は、古墳の可能性があるため、古墳調査に準じて東西南北にそれぞれ15m、幅1mのトレンチを設定した。

調査は、雜木林・雜草を伐採したのち、表土層約20cm～30cmを発掘したところで地山基盤層に達した。造構は検出されなかつたが、トレンチの交差する中心付近の表土層から、約30点の土師器小破片が出土した。古墳の可能性は極めて少ないが、なお土塙墓の可能性も否定できないので、さらにボーリング探査を行つたが明確な検証は得られなかつた。

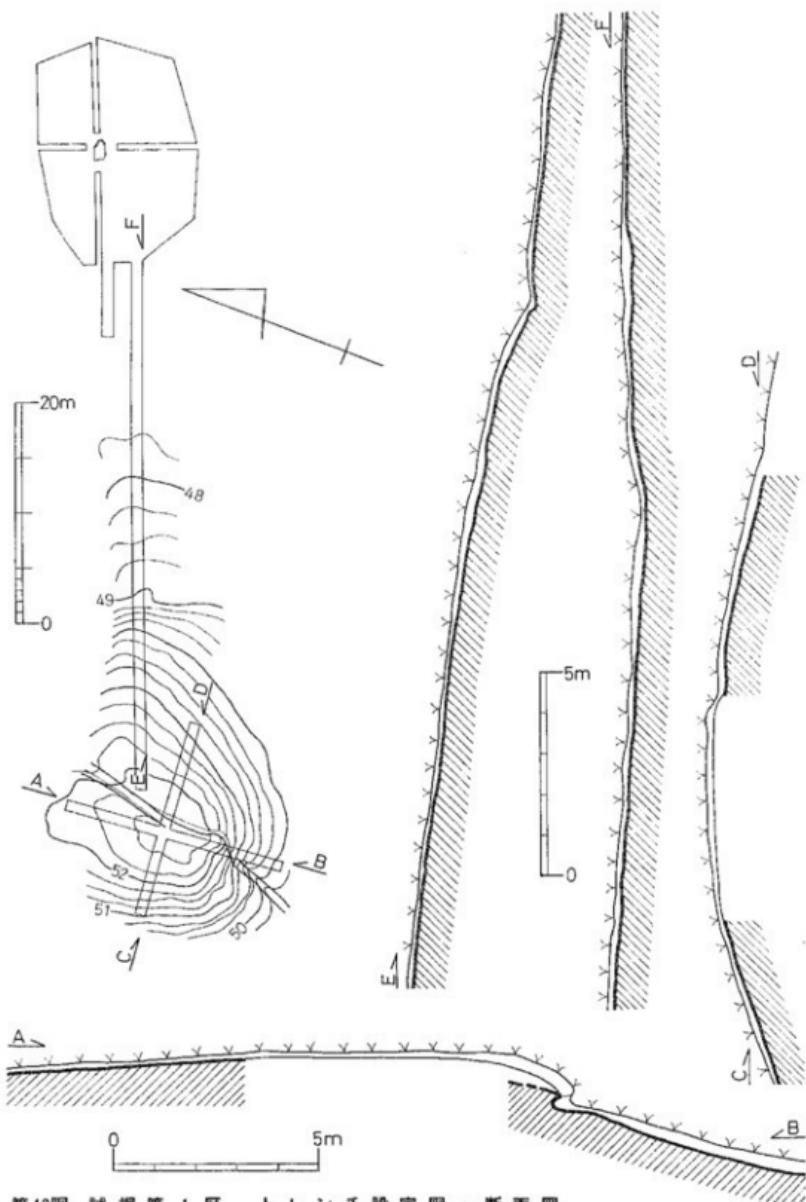
この地区での確認調査の結果は以上のような状況で、なお若干遺跡の可能性は残されるが、造成工事設計の一部手直しで、この地点は現状保存区域となつたため、確認調査をこの時点で終了した。

### 第2節 試掘第2区（正崎浦山）

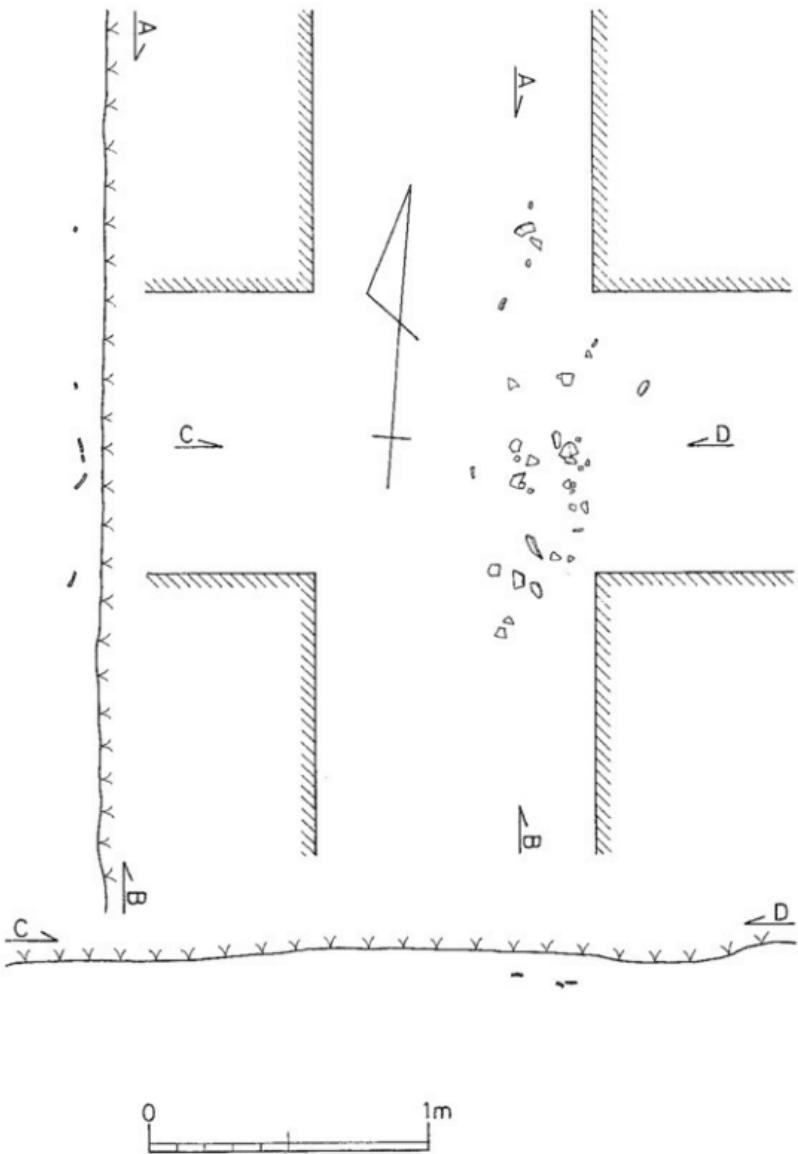
#### （1）調査前の概況

試掘第2区は、正崎2号古墳と正崎4号古墳の間の尾根稜線から北側の斜面で、東西約40m、南北約20m、面積約800m<sup>2</sup>の地域である。東西両側に古墳があることから遺跡の可能性があるとして確認調査を行つた。

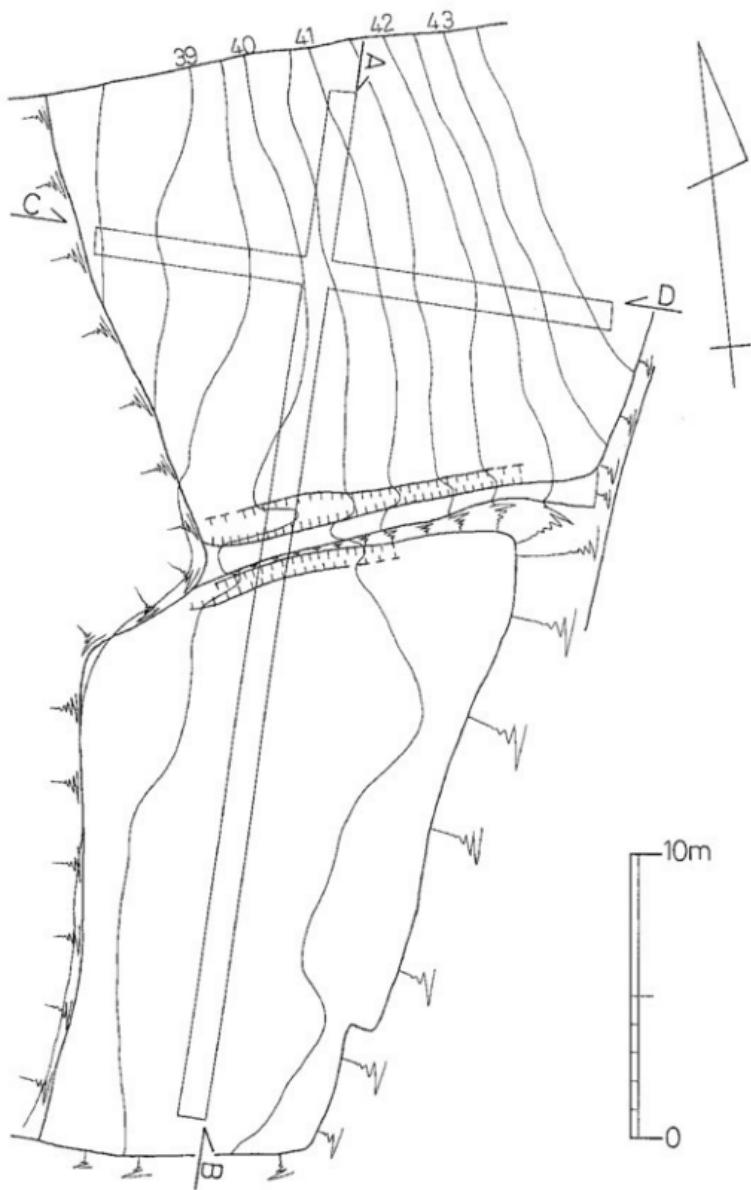
この地区はすでに開墾細の造成によって地形が大きく変えられており、削平された部分も多かつた。桃、葡萄、柿などを栽培する果樹園であった。



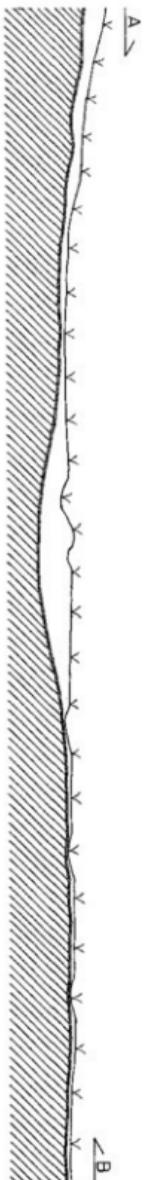
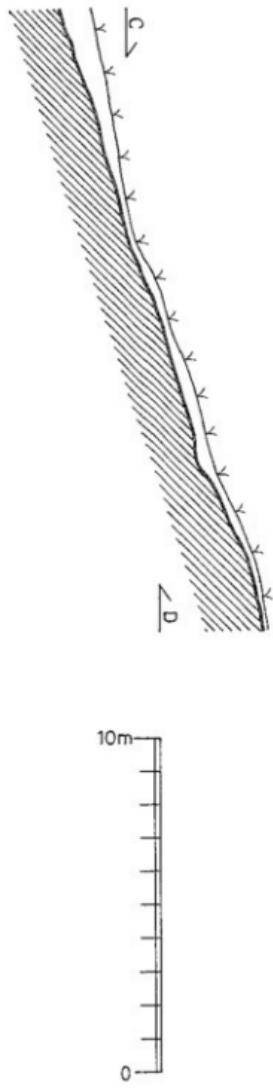
第43図 試掘第1区 トレーンチ設定図・断面図



第44図 試掘第1区 土器出土状況



第45図 試掘第2区 トレンチ設定図



第46図 試 挖 第 2 区 ト レン チ 断 面 図

## (2) 調査の概要と結果

北に向く開墾畑の斜面東西に約40m、南北約20m、延長60mのトレーニチを設定して発掘調査を実施した。

調査の結果、この地区から遺構は検出されず、土器等も全く出土しなかった。したがって試掘第2区には遺跡が存在しないことが確認された。

## 第3節 試掘第3区（正崎浦山）

### (1) 調査前の概況

試掘第3区は、正崎2号古墳の所在する丘陵尾根綫から北側民潤地に臨む斜面で、東西約90m、南北約70m、面積約6,300 m<sup>2</sup>の地域である。事前調査によつて土器散布地とわかり、確認調査を実施することになった。

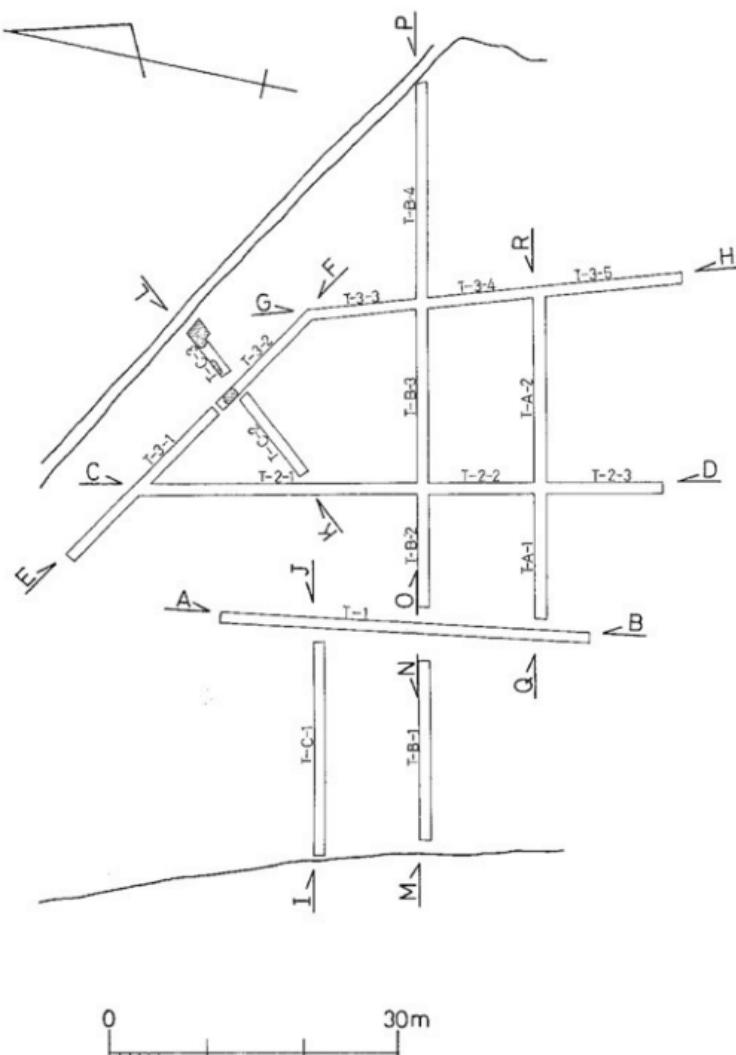
この地区はすでに開墾され、桃・葡萄などが栽培されており、一部に桧が植えられていた。

### (2) 調査の概要と結果

全域に東西3本と南北3本、延長320m、巾1mのトレーニチを設定して発掘調査を行つた。

調査の結果、東部の斜面中腹から山裾へかけて弥生式土器包含層が検出された。包含層は浅いところで約30cm、深いところでは約1.5mにおよぶ堆積があり、3か所に土器溜りが検出された。

この結果、弥生時代の住居址等の存在が予想されることから、あらためて包含層のある範囲を全面発掘の調査を行うこととなった。



第47図 試掘第3区 トレーンチ設定図

## 第4節 試掘第4区（正崎吉野）

### （1）調査前の概況

試掘第4区は、正崎2号古墳の所在する丘陵尾根稜線から南の吉野池に臨む斜面で、南北約100m、東西約90m、面積約9,000m<sup>2</sup>の範囲である。事前調査によって土器散布地とわかり確認調査の対象となった。

この地域は、開墾された畑と雜木林、藪などがあり、吉野池付近は水田であった。

### （2）調査の概要と結果

調査は第1次調査と、その結果からさらに範囲を拡大した第2次調査を行なった。第1次調査は、多くの土器が散布する吉野池付近の田畠に、延長200m、巾1mのトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

調査の結果、この地域は堆積層が厚く、柔らかい粘土（泥状）で、2m以上の掘り込みにも地山基盤層に達することができなかった。堆積層は上方から流れ込んだ土砂が谷に堆積した状態であった。表土および耕土の下に灰褐色の層があり、近世、中世の土器を若干包含している。その下に現地表下1m～1.6mの灰色・黒灰色の粘土層があり、須恵器・土師器をかなり包含している。いずれも二次的な流れ込みによる堆積とみられる。遺構は全く検出されなかつた。わずかに東部山腹の（T1～12）トレンチでは地山層が検出され数点の弥生式土器片が出土した。この地区では、表土、耕土の中から、かなり多くの須恵器・土師器が採集されたことから、二次三次の土砂流入堆積があつたと考えられる。

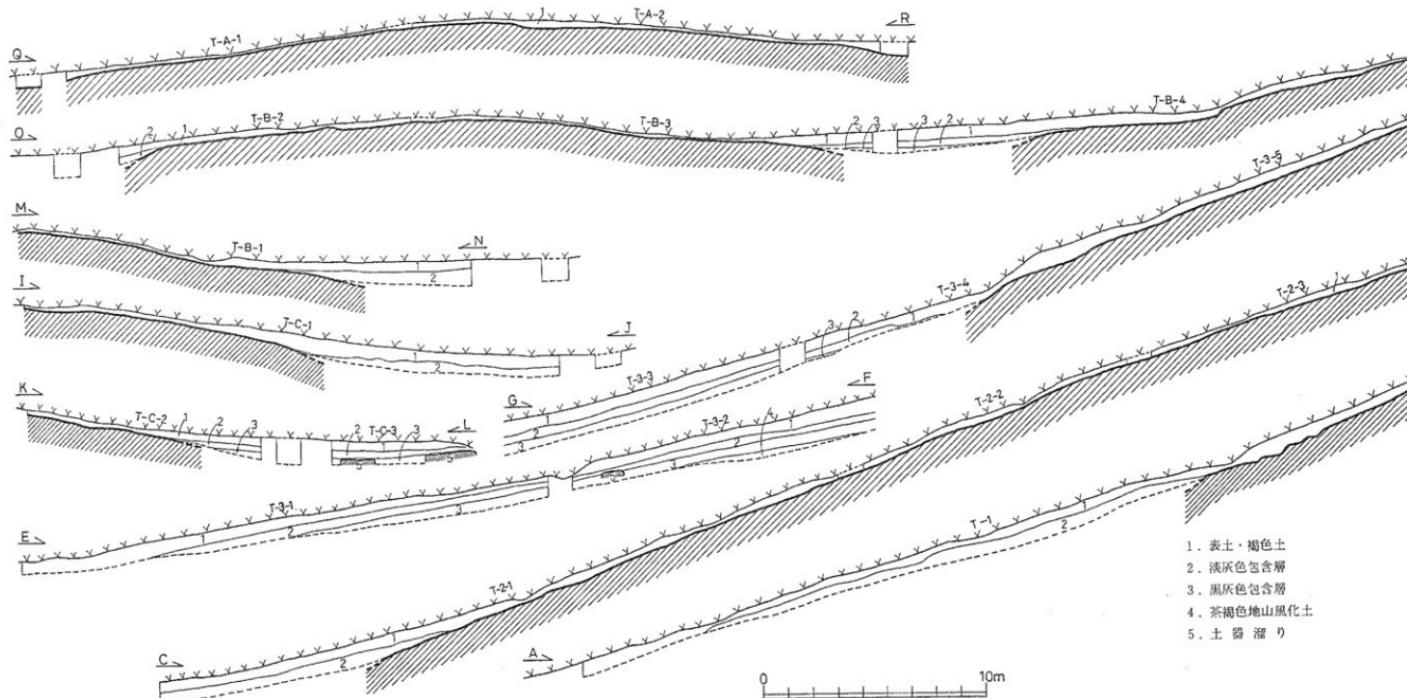
第2次調査は、2号古墳に接する丘陵尾根から中腹へ、さらに吉野池に近いところまで、北から南へ三本のトレンチを設定して発掘調査を行つた。

調査の結果、丘陵尾根から肩部にかけては表土が殆んど流失し地山は浅かった。遺構はなく包含層も認められなかつた。（T4-3）（T4-4）から数点の弥生式土器が出土した程度である。

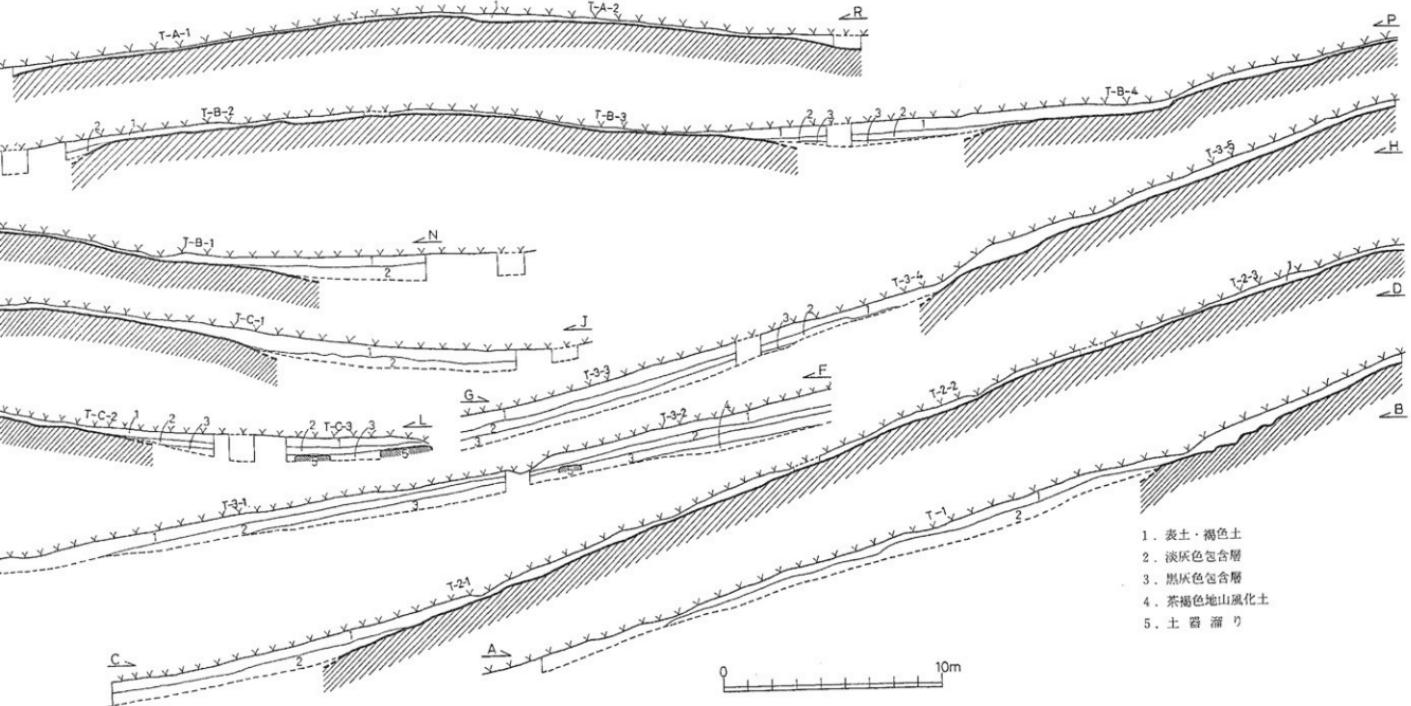
斜面西側のAトレンチ（第51図T-A）ほぼ全体に地山層が確認できたが、中腹から山腹部に非常に厚い堆積層があり、現表土より3m～4mの深さを測る。黄褐色の地山花崗岩媒乱土の基盤上に、黒色・濃灰色・灰色の層が厚く重なり、黒色層、濃灰色層（T-AのC）には弥生式土器がかなり包含していた。淡灰色層・灰色層（T-AのA・B）は須恵器・土師器を包含している。Aトレンチから遺構は検出されなかつたが、その可能性は残されている。

中央Bトレンチ（第51図T-B）もAトレンチとほぼ同様の状況を呈している。斜面上方の丘陵尾根から肩部にかけてほとんど堆積ではなく、中腹部には厚い堆積層がみられ、（T-BのA・B・E）には土師器・須恵器の破片がかなり多量に包含されていた。柱穴の可能性のある遺構も2・3検出されたが住居址の確証は得られなかつた。状況からみて遺跡の可能性は残されている。

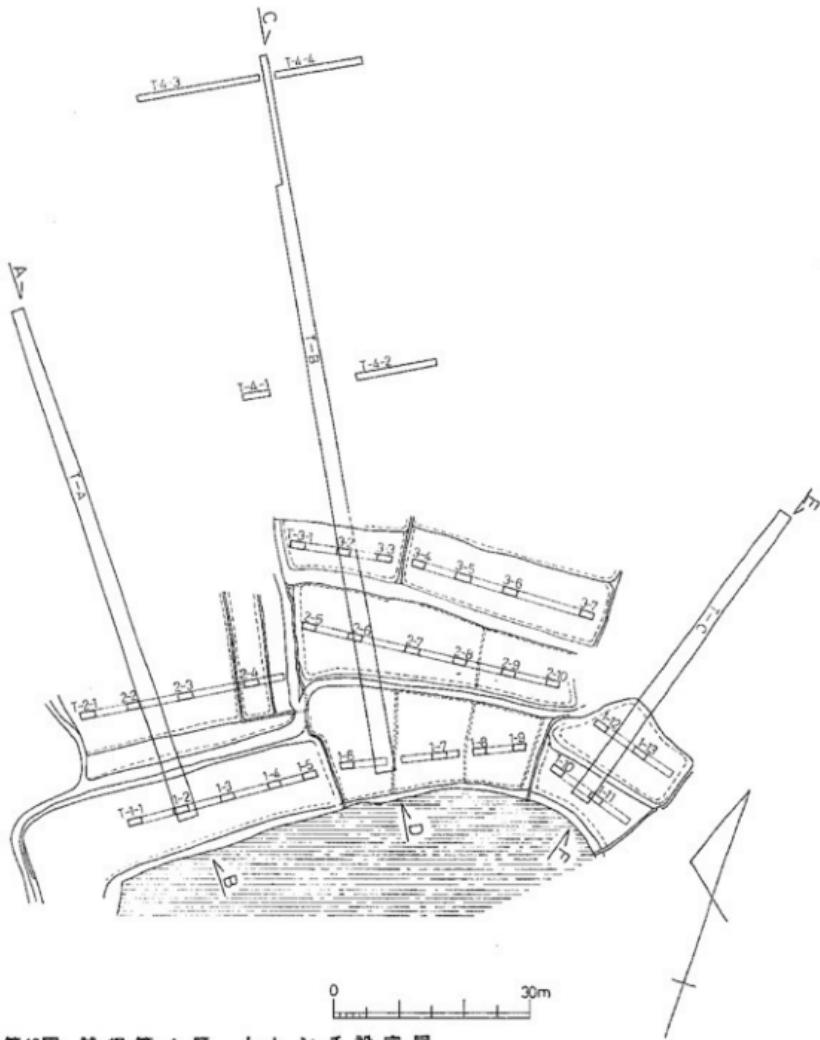
東Cトレンチ（第51図T-C）はT-A・T-Bと違い、山腹まで急な斜面で、包含層はほとんどなく、吉野池に近いところで厚い堆積層となつてゐる（T-CのC・B）にわずかに土師器・須恵器がみられる程度で、A・Bトレンチにくらべ少ない。遺構は全く検出されなかつた。



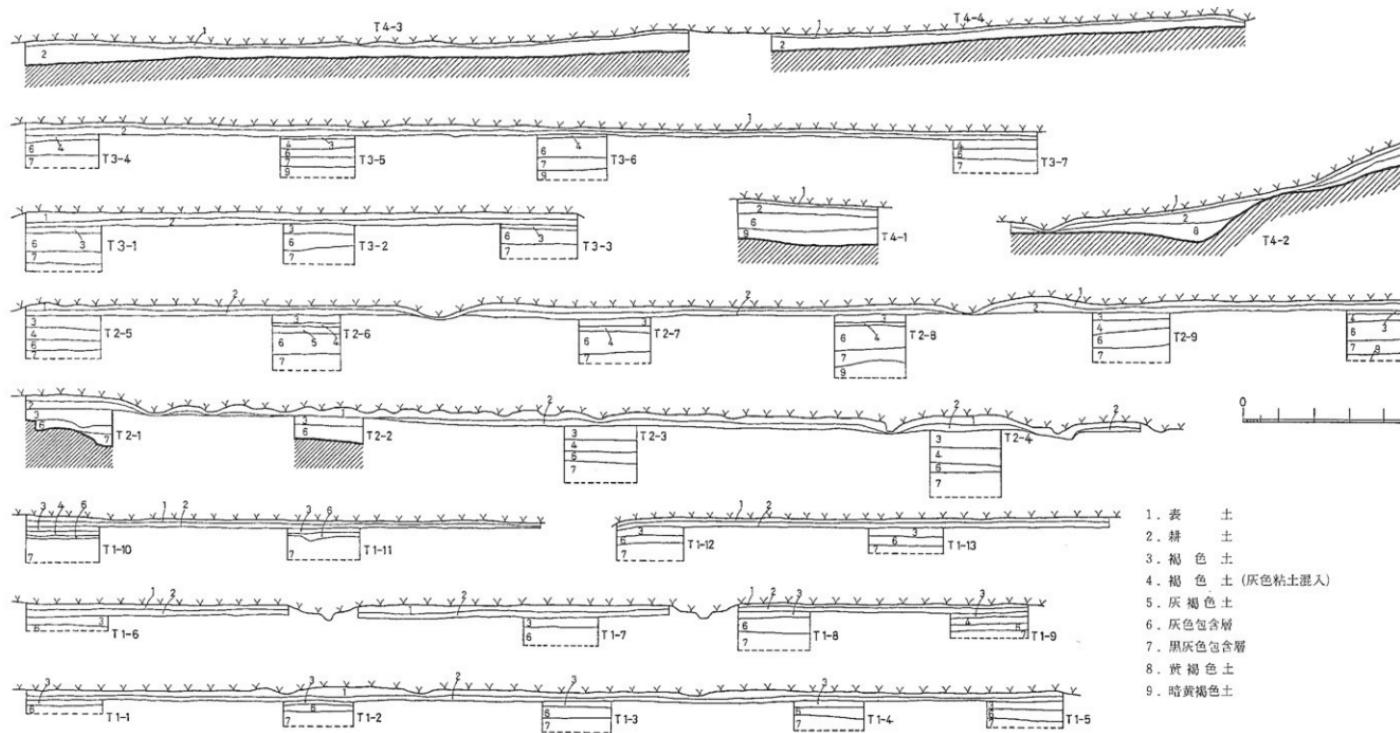
第48図 試掘第3区 トレンチ断面図



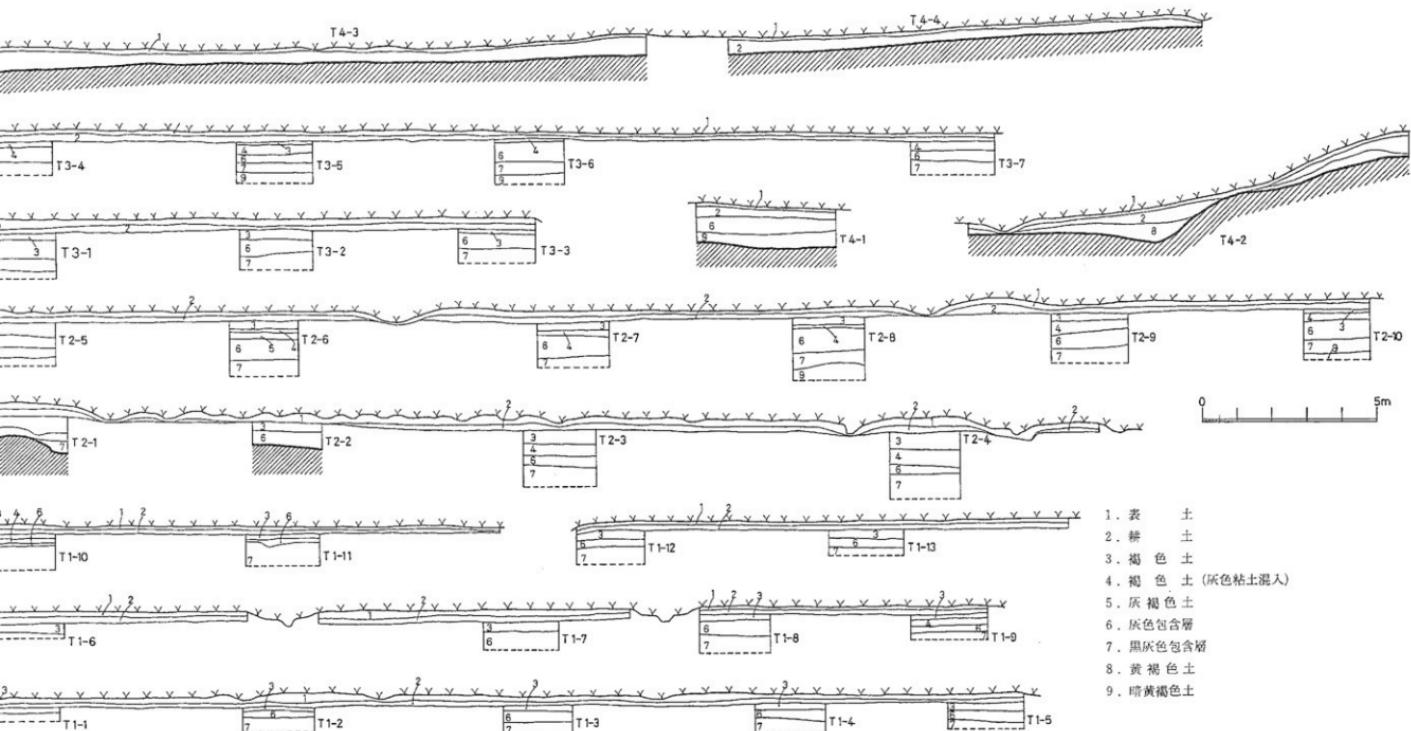
8図 試掘第3区 トレンチ断面図



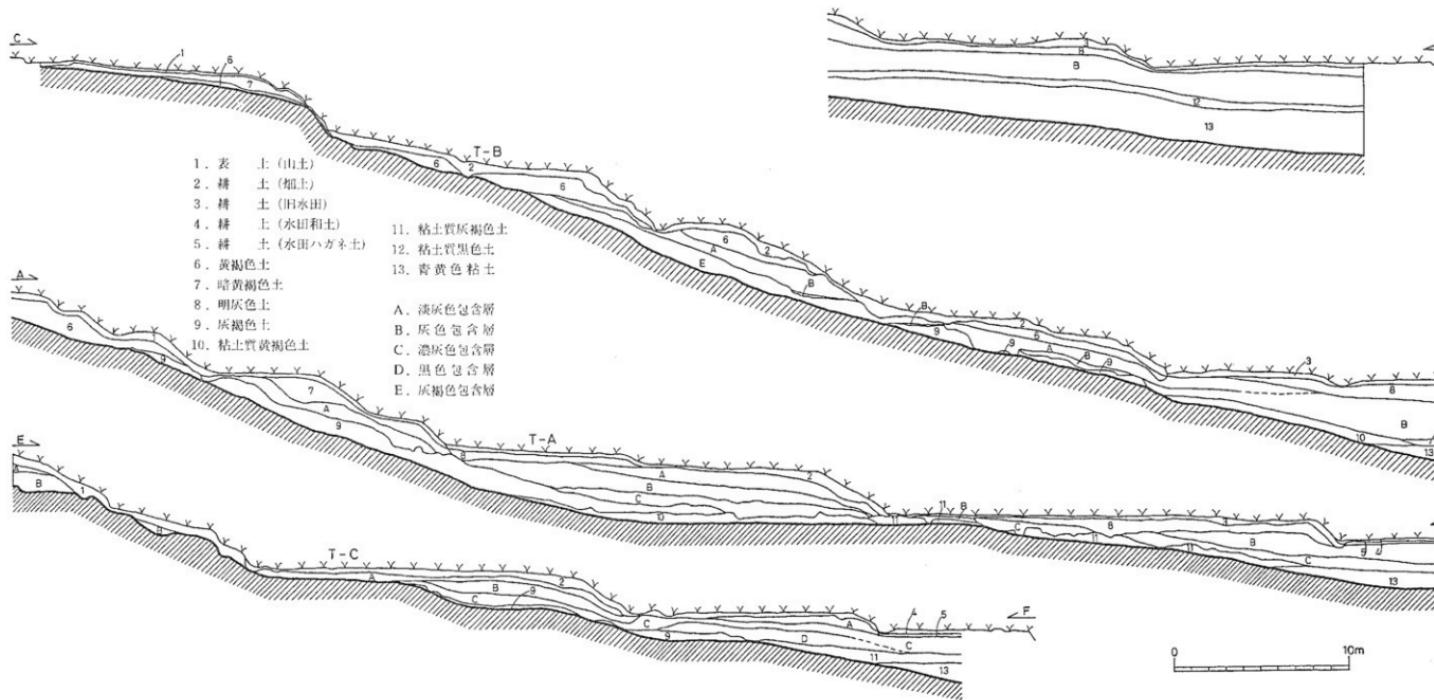
第49図 試掘第4区 トレンチ設定図



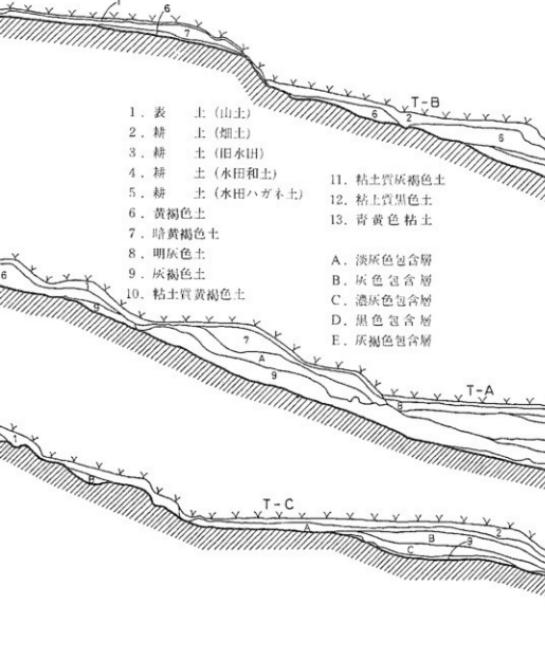
第50図 試掘第4区 トレンチ断面図



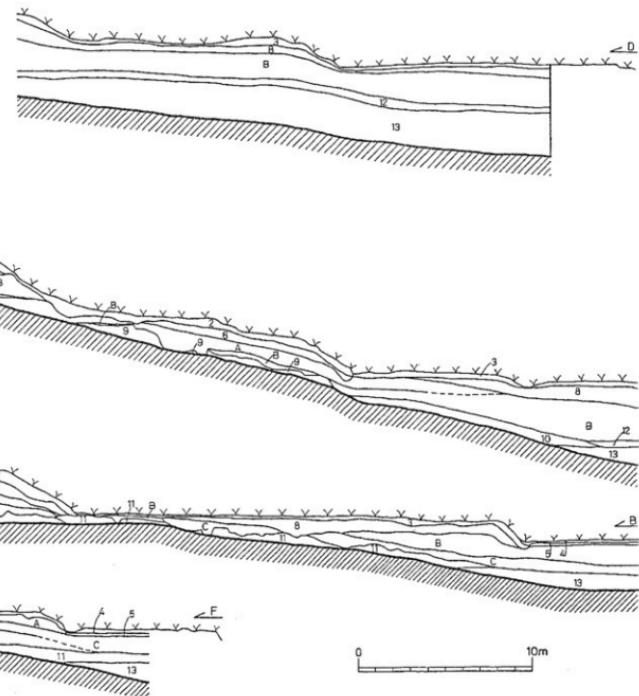
試験区 第4区 トレンチ断面図



第51図 試掘第4区 トレンチ断面図



A, 淡灰色包含層  
B, 灰色包含層  
C, 濃灰色包含層  
D, 黑色包含層  
E, 灰褐色包含層



試掘第4区 トレンチ断面図

以上第1次第2次の調査の結果、明確な遺構は検出されなかったが、厚い土器包含層があり、遺跡の可能性は否定できないが概して二次的な堆積で上方からの流入による包含層と考えられる。

今後この地区に遺構に影響をもつような構造物等の建設については再調査の必要があるとの見解を当局に示し、確認調査の記録をとどめた段階で試掘第4区の調査を終了した。

## 第5節 試掘第5区（尾谷牛岡）

### （1）調査前の概況

試掘第5区は、総合公園造成区域東部で、尾谷字牛岡の丘陵斜面から谷底に及ぶ南北約180m、東西約90m、面積16,000m<sup>2</sup>の地域である。調査前は、開墾された果樹園と畝、雑木林、谷間は水田となっていた。事前調査により土器散布地とわかり確認調査を行うこととなった。

### （2）調査の概要と結果

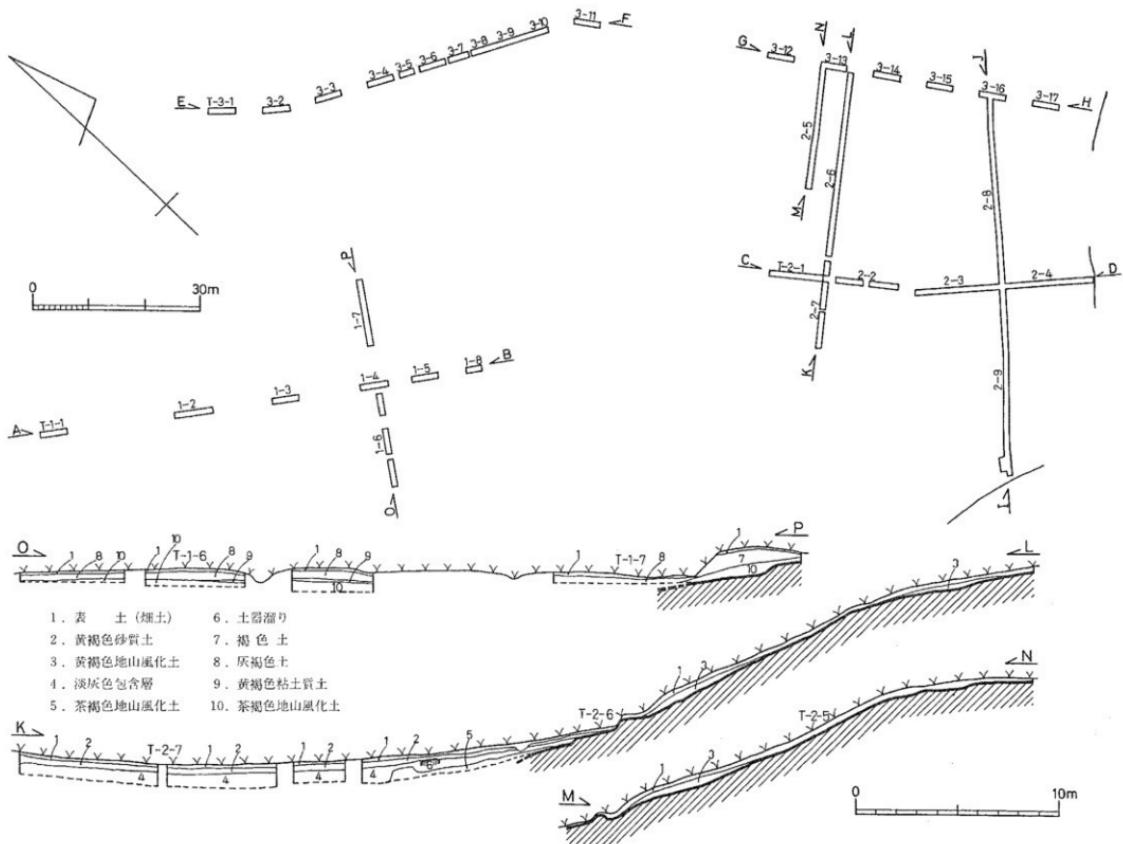
全域を3区にわけ（第52図T-1・T-2・T-3）延長440m、巾1mのトレンチを設定して発掘調査を行った。

T-1は、谷水田跡で遺構は全くなく、東部山裾（第52図T-1-7）トレンチで若干の土師器・須恵器片を検出した程度である。

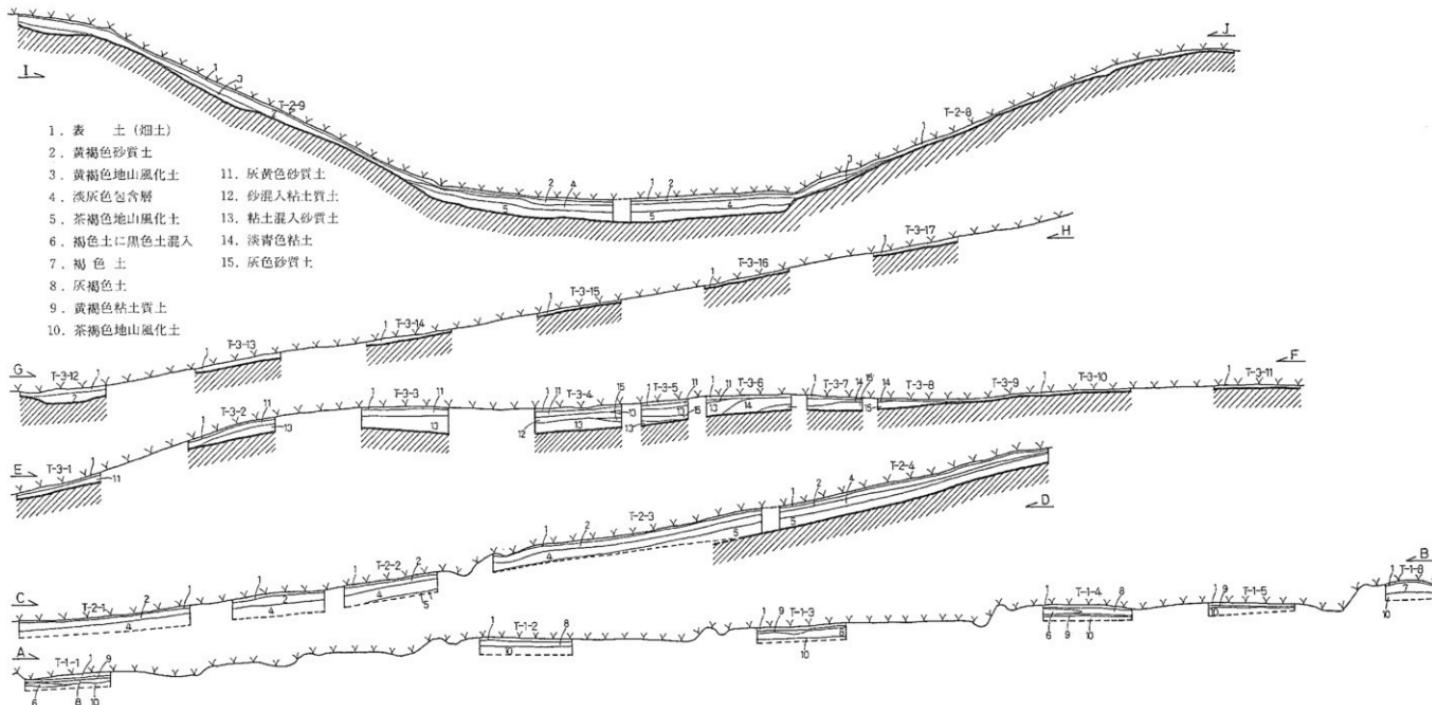
T-2は、谷の中心部で深いところは約1.5m、平均1m程度の堆積があり、表土層耕土層の下に約50cm程度淡灰色包含層が堆積する。遺構は検出されなかったが、（第52図T-2-6の4・6）から若干の弥生式土器が出土した。

T-3は、丘陵尾根上で表土は流出し20cm程度掘り下げて地山層に達した。遺構・遺物も全く検出されなかった。

この地区では、明確な遺構は検出されなかったが、谷底部に土器包含層の堆積があり、若干の弥生式土器を出土することから、遺構の可能性は残されている。現状は公園造成によって包含層を含む谷底全体が埋め立てられている。



第52図 試掘第5区 レンチ設定図・レンチ断面図



第53図 試験第5区 トレンチ断面図

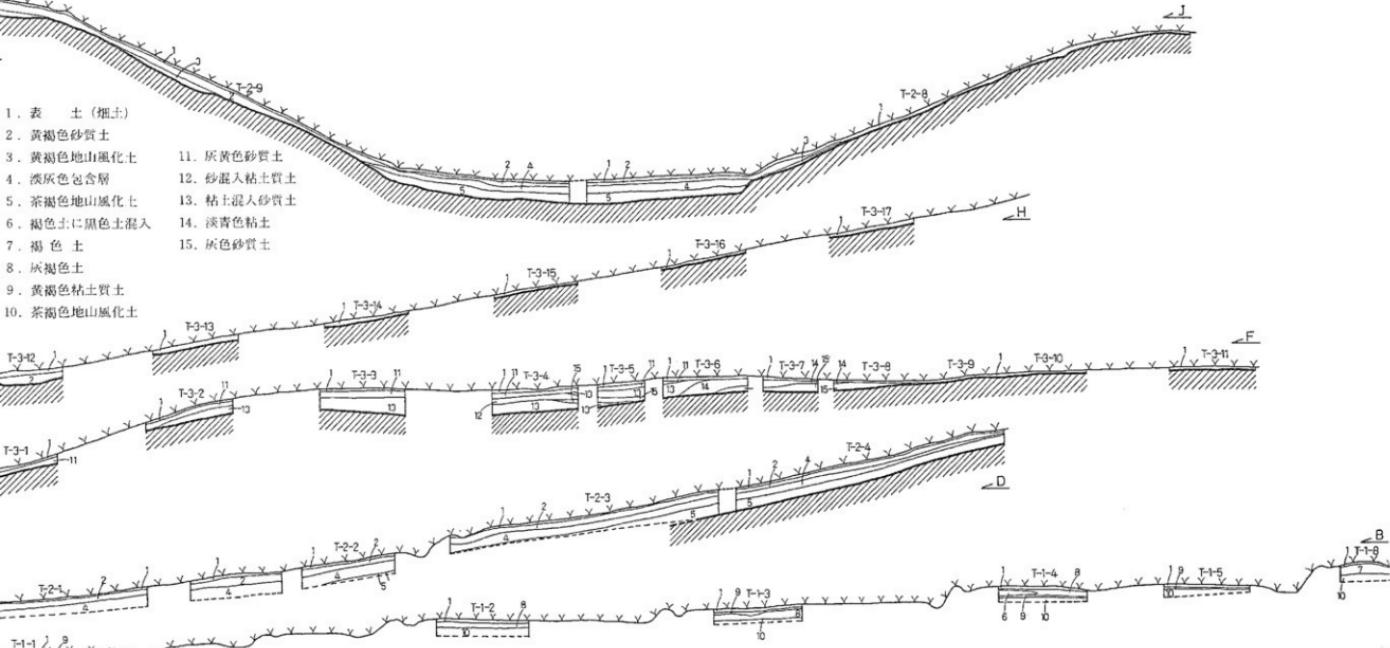


図 試掘第5区 トレンチ断面図

図 版



1. 正崎丘陵全景

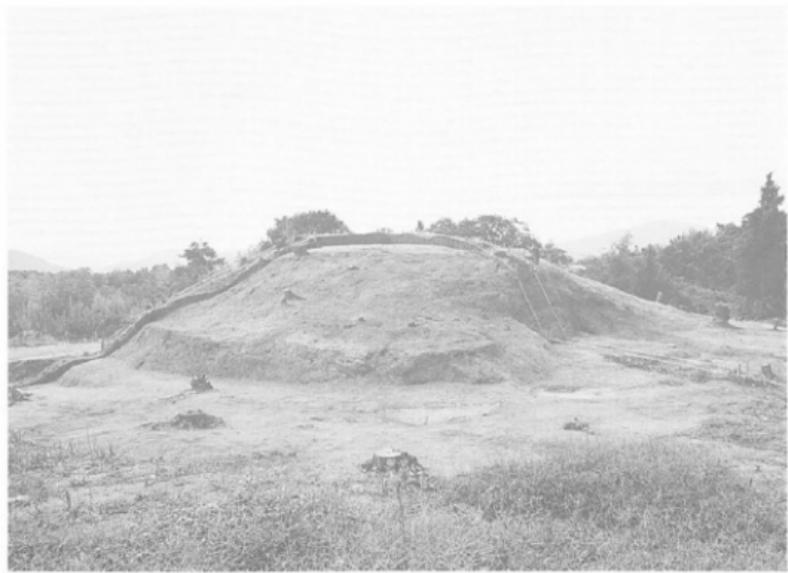


2. 正崎2・4号古墳遠景（北方から）

図版2



1. 正崎2号古墳調査前外観（南から）



2. 正崎2号古墳調査中外観（東から）

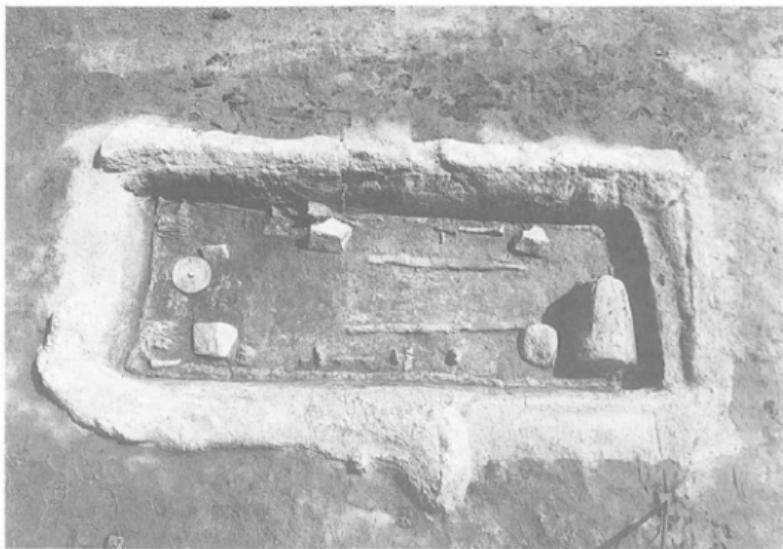


1. 正崎2号古墳墳丘盛土状況（南から）



2. 正崎2号古墳墳丘盛土状況（東から）

图版4



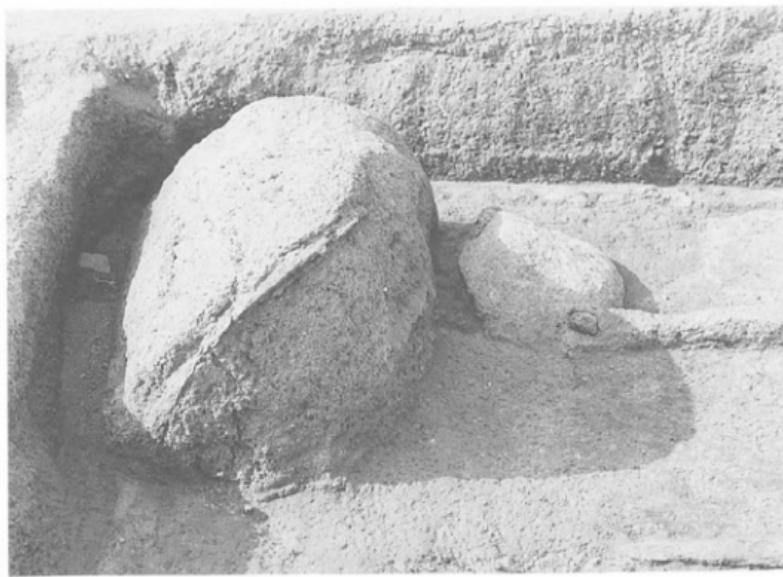
1. 正崎2号古墳第1主体出土状况



2. 正崎2号古墳第1主体遺物出土状况



1. 正崎2号古墳第1主体遺物出土状況

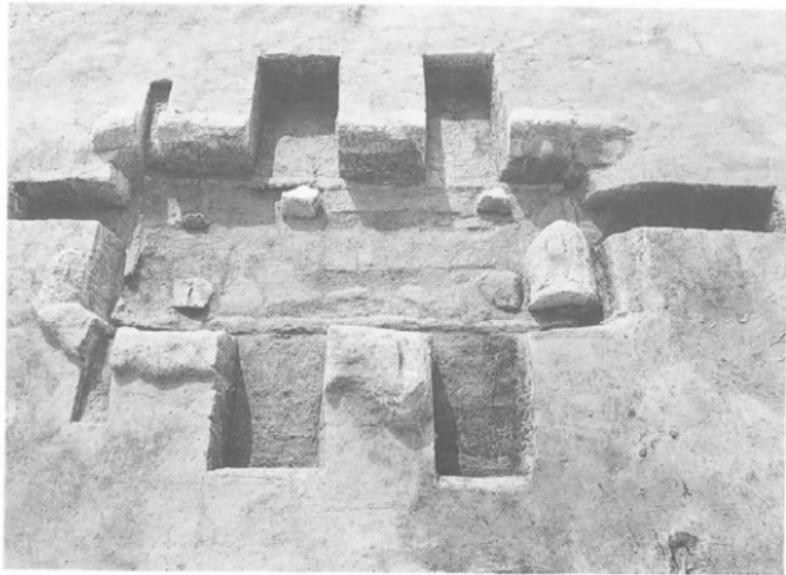


2. 正崎2号古墳第1主体短甲出土状況

図版6



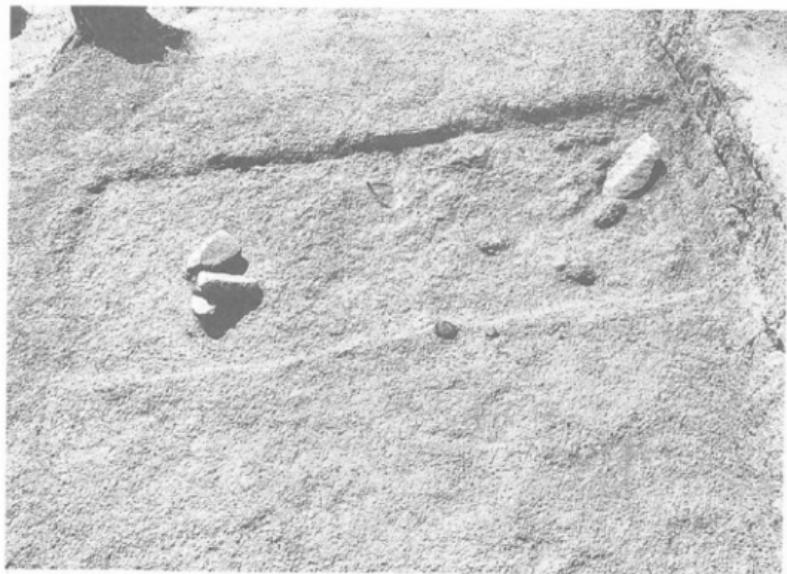
1. 正崎2号古墳三環鈴出土状況



2. 正崎2号古墳第1主体断面調査状況



1. 正崎2号古墳第2主体出土状況



2. 正崎2号古墳第2主体出土状況

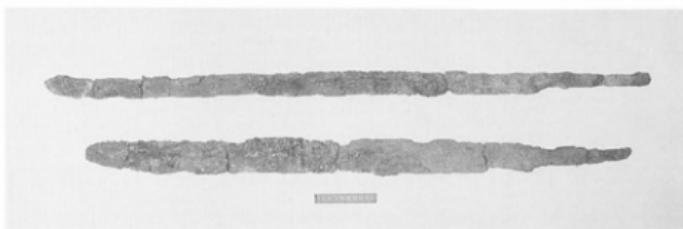
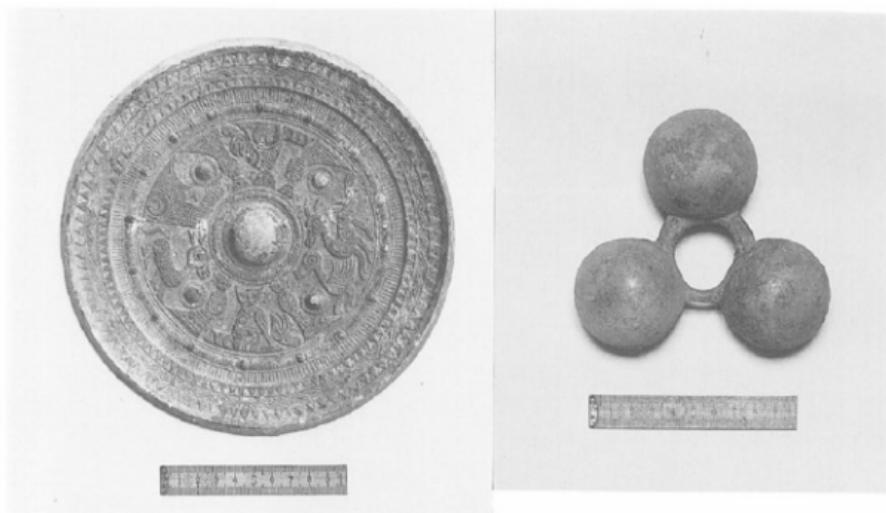
図版8



1. 正崎2号古墳墳丘断面状況（南から）

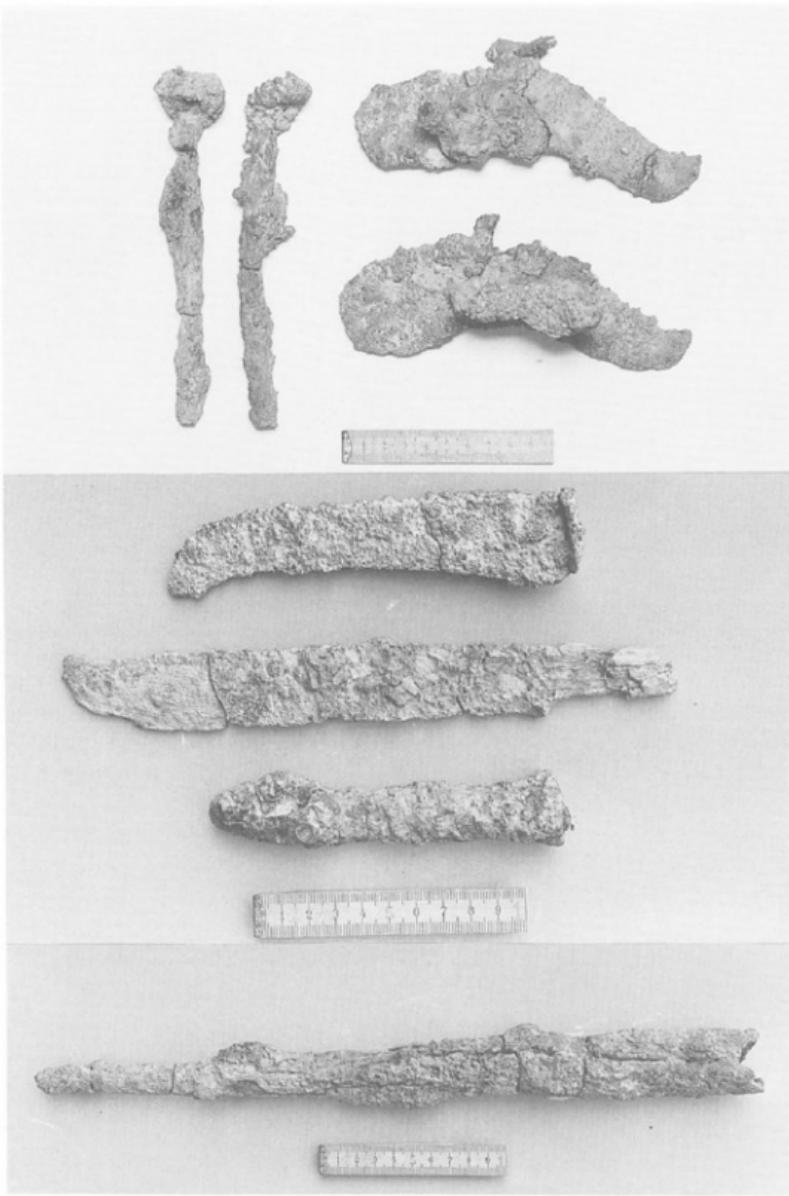


2. 正崎2号古墳下層遺構出土状況（西から）



1. 正崎2号古墳出土遺物

図版10



1. 正崎2号古墳出土遺物



1. 正崎2号古墳出土遺物



2. 正崎2号古墳出土遺物

図版12



1. 正崎4号古墳遠景（北方より）



2. 正崎4号古墳調査前外観（西より）



3. 正崎4号墳墳丘調査状況（南より）



1. 正崎4号古墳箱式石棺出土状況



2. 正崎4号古墳箱式石棺出土状況

図版14



1. 正崎4号古墳調査後全景（南より）



2. 正崎4号古墳出土遺物



1. 浦山遺跡調査前外観（北より）



2. 浦山遺跡発掘状況（北より）

図版16



1. 浦山遺跡土器窯り出土状況



2. 浦山遺跡土器窯り出土状況



1. 浦山遺跡出土弥生式土器



2. 浦山遺跡出土土器文様

図版18



1. 浦山遺跡ピット状遺構（北より）



2. ピット内出土石器・土器・木の実



1. 試掘第1区全景（東より）



2. 試掘第1区全景（西より）

図版20



1. 試掘第2区調査前全景（西より）



2. 試掘第2区調査後全景（西より）



1. 試掘第4区全景（南より）



2. 試掘第4区トレンチ（西より）



3. 試掘第4区トレンチ内土器出土状況

図版22



1. 試掘第4区TAトレンチ



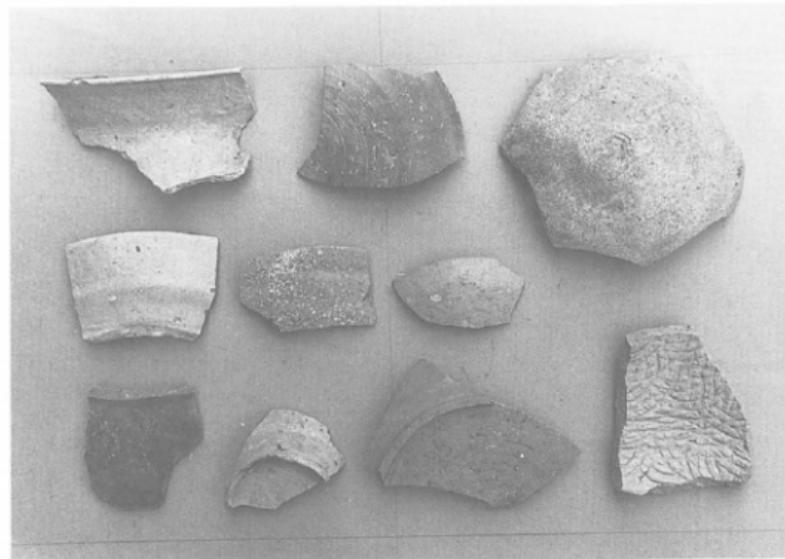
2. 試掘第4区TBトレンチ



3. 試掘第4区TCトレンチ



1. 試掘第4区出土弥生式土器



2. 試掘第4区出土須恵器・土師器

図版24



1. 試掘第5区全景（北より）



2. 試掘第5区丘陵頂部トレンチ



3. 試掘第5区斜面トレンチ



1. 試掘第5区谷底部トレンチ



2. 試掘第5区出土弥生式土器

---

正 峠 2 · 4 号 古 墳

1989年3月発行

発 行 岡山県山陽町教育委員会  
岡山県赤磐郡山陽町下市337

印 刷 株式会社 山陽 プラン  
岡山県赤磐郡山陽町上仁保45-1

---

